福岡市埋蔵文化財調査報告書第453集

比恵遺跡群 (22)

HI E

－ 比恵遺跡群第43次発掘調査報告書 －

1996

福岡市教育委員会

HI E

比 恵 遺 跡 群 (22)

－ 比恵遺跡群第43次発掘調査報告書 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第453集

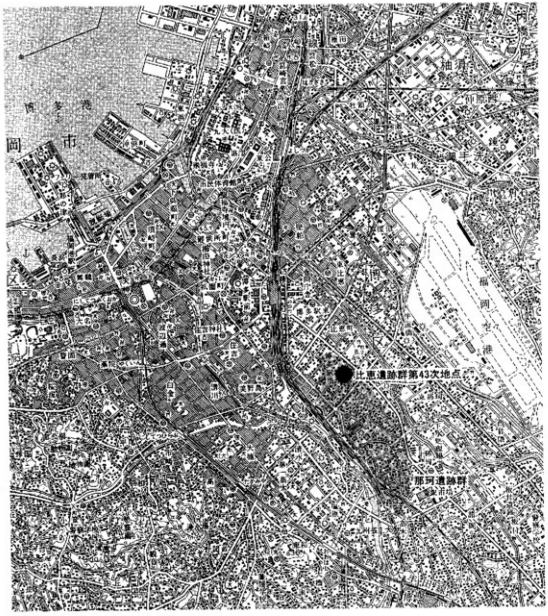


Fig. 1　比恵遺跡群位置図 (1/50,000)

遺跡略号HIE-43
調査番号　9229

1 9 9 6

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

福岡市の博多区は、弥生時代の奴国の中心として、学史的に有名な板付遺跡を始めとして、数多くの重要な埋蔵文化財が包蔵されている地域です。また比恵遺跡群が所在するこの地域は、博多駅の南側に位置し、都市の再開発化が著しく進んでいる地域でもあり、それによる発掘調査が盛んに行われています。

今回の報告は平成４年度に実施した第43次地点の調査のもので、調査では弥生時代中期の円形住居址など、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡を調査しました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、学術研究、文化財保護の普及啓発活動においても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、綜合警備保障株式会社、および施工業者の株式会社清水建設を始めとして関係各位のご協力にたいして、厚く感謝の意を表します。

平成８年３月29日

福岡市教育委員会
教育長　尾　花　　剛

例　　言

1．本書は、福岡市教育委員会が平成４年（1992）に比恵遺跡群内で実施した、第43次地点の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は上記の主体により行われ、調査の担当は山崎龍雄が行った。
3．遺構実測は山崎龍雄、瀬戸敬治、堀川ヒロ子、大賀順子、坂木智子が主体となって行い、また遺物の実測と図面の浄書は山崎と井上加代子が行った。
4．遺構と遺物の写真は山崎が行った。
5．井戸出土種実の同定については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
6．本調査区は同一敷地内で平成２年に調査を実施した第33次地点の両側部分であり、北側をⅠ区、南側をⅡ区とし、Ⅰ区のピット以外の遺構番号は第33次地点からの通し番号とし、ピットは二千番台から番号を付している。Ⅱ区は独自で番号を付した。
7．本書に使用した方位は磁北であり、真北との偏差は西偏６°21′である。
8．調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用して行く予定である。
9．本書の執筆・編集は山崎が行ったが、SC66出土の青銅器鋳型片については、文化財部長　後藤直氏に実測・浄書、原稿をお願いした。

比恵第43次調査概要

調査次数	調査番号	遺跡略号	調査地地番	（㎡）申請面積	（㎡）調査面積	申請者	調査期間	事前審査番号
比恵第43次	9229	HE-43	福岡市博多区博多駅南４丁目154-3外	1,579（614）	354	綜合警備保障株式会社	1992年８月20日～11月30日	３－２－402

本 文 目 次

第1章　はじめに …… 1
1．調査に至る経過 …… 1
2．発掘調査の組織 …… 1
3．第33次調査の概要 …… 1
第2章　遺跡の立地と歴史的環境 …… 2
1．遺跡の立地と歴史的環境 …… 2
第3章　調査の記録 …… 3
1．調査の概要 …… 3
2．調査の記録 …… 3
3．小結 …… 35
4．井戸出土の種実の同定 …… 36

図 版 目 次

PL.1－ ①調査区全景（南東から） ②Ⅰ区全景（北東から） ③Ⅱ区全景（北東から） ④SB111・SC65（東から） ⑤SB112（北から）
PL.2－ ①SC66・85（西から） ②SC66・114（西から） ③SC66・114～117（西から） ④SC85 鉄斧出土状況 ⑤SK106（北から） ⑥SC114下SD110（南から） ⑦SC77（北から） ⑧SC77遺物出土状況
PL.3－ ①SE68（南から） ②SE72（南から） ③SE74（北東から） ④SE76（西から） ⑤SE80（南西から） ⑥SE81（東から） ⑦同遺物出土状況 ⑧SE86（北西から）
PL.4－ ①SE87（北西から） ②SE89・SK84（北西から） ③SE104（南から） ④SE105（北東から） ⑤SK73（西から） ⑥SK83・88（西から） ⑦Ⅱ区SE01（南から） ⑧Ⅲ区SK05（東から）
PL.5－ 各遺構出土遺物Ⅰ
PL.6－ 各遺構出土遺物Ⅱ

挿 図 目 次

Fig. 1　比恵遺跡群位置図（1/50,000）…… 中表紙
Fig. 2　第43次地点位置図（1/6,000）…… 2
Fig. 3　遺構全体図（1/200）…… 折り込み
Fig. 4　掘立柱建物と出土遺物（1/80、1/4、1/3）…… 5
Fig. 5　SC65・77とSC65出土遺物（1/60、1/4）…… 6
Fig. 6　SC66・85・114～117（1/60）…… 折り込み
Fig. 7　SC114～117（1/60）…… 折り込み
Fig. 8　SC66出土遺物Ⅰ（1/4）…… 7
Fig. 9　SC66出土遺物Ⅱ（1/4、1/6）…… 8
Fig.10　SC77出土遺物（1/4、1/3）…… 9
Fig.11　SC85出土遺物（1/4、1/6）…… 10
Fig.12　SC85・114出土遺物（1/4）…… 11
Fig.13　SC66・85出土遺物（1/3、2/3、1/1、1/4）…… 12
Fig.14　各遺構出土鉄器・鋳型・鍬滓（1/3、2/3、1/1）…… 13
Fig.15　各住居址内ピット、土坑出土遺物（1/4）…… 14
Fig.16　SC66・114内ピット出土遺物（1/4、1/3）…… 15
Fig.17　第33次地点境界地にかかる住居址SC69・118（1/80）…… 15
Fig.18　SE68・72・74・76・80・81（1/40）…… 17
Fig.19　SE68出土遺物（1/4）…… 18
Fig.20　SE72・74・76出土遺物（1/4）…… 20
Fig.21　SE76・80・81出土遺物（1/4）…… 21
Fig.22　SE86・87・89・104・105・SK84（1/40）…… 22
Fig.23　SE86・89・104出土遺物（1/4）…… 23
Fig.24　SE87出土遺物Ⅰ（1/4）…… 24
Fig.25　SE87出土遺物Ⅱ（1/4）…… 25
Fig.26　各井戸出土木器Ⅰ（1/3、1/4、1/9）…… 26
Fig.27　各井戸出土木器Ⅱ（1/4）…… 27
Fig.28　各井戸出土石器・鉄器（1/3）…… 27
Fig.29　SK73・79・83・88（1/40）…… 29
Fig.30　各土坑出土遺物（1/4、1/3）…… 30
Fig.31　Ⅱ区検出遺構と出土遺物（1/40、1/4）…… 32
Fig.32　Ⅰ・Ⅱ区ピット出土遺物（1/3、1/4）…… 33

第1章　はじめに

1．調査に至る経過

申請地は平成2年度に、別の開発計画に伴って発掘調査が実施されていた地点であるが、諸般の事情により事業計画が中止されていた。その後、地権者が綜合警備保障株式会社に変わり、平成4年2月10日に改めて開発申請を受けた。今回は敷地全面について、建物を建設するという工事計画のため、計画予定地内に残っていた未調査部分について、記録保存の為の調査を実施することが必要となり、地権者と協議を重ねた。その結果、調査費用を原因者が負担するということで協議が成立し、発掘調査を平成4年8月20日から11月30日まで実施した。整理作業は1995（平成7）年度に実施した。

2．発掘調査の組織

調査委託　総合警備保障株式会社社長　村井恒夫

調査主体　福岡市教育委員会

調査総括　埋蔵文化財課長　折尾学（前任）、荒巻輝勝（現任）
同　第2係長　塩屋勝利（前任）、山口譲治（現任）

庶務担当　吉武（旧姓吉田）真由美（前任）、西田結香（現任）

調査担当　山崎龍雄

整理補助　井上加代子

調査・整理作業　瀬戸敬治、上野龍夫、小早川邦雄、立水清、徳永静雄、村山市次、石川洋子、坂本千寿子、澄川アキヨ、武田潤子、永松伊都子、中村フミ子、西本スミ、野口ミヨ、日比野典子、藤野信子、堀川ヒロ子、森山キヨ子、大賀順子、坂本智子、田口美智子、塚本直子、上野裕子

3．第33次調査の概要

調査は平成2年10月4日から翌3年2月8日まで実施した。調査面積は965㎡である。検出した遺構の時期は弥生時代中期から古墳時代にかけてであり、検出した主な遺構は竪穴住居址15軒（弥生中期3軒、後期12軒）、掘立柱建物2棟（弥生後期）、井戸12基（弥生中期2基、後期10基）、貯蔵穴2基（弥生中期）、土坑17基（弥生中期3基、後期13基、古墳中期1基）、甕棺墓1基（弥生後期）などである。

出土遺物は井戸と土坑からの出土を中心にコンテナで157箱出土している。特に井戸からは多数の完形の土器とともに、木製品も多く出土している。くり抜きの木臼、ねずみ返し、鞍など、貴重な木製品が出土している。また、2基の貯蔵穴からも多量の遺物が出土している。中期末の時期であるが、炭化米、木製品、完形の土器類、椰子の実容器などがある。

第2章　遺跡の立地と歴史的環境

1．遺跡の立地と歴史的環境

福岡平野は西は背振山塊から派生する長垂丘陵、東は犬鳴・三郡山地に画された地域で、南北に貫流して博多湾に注ぐ室見川・樋井川、那珂川・御笠川、宇美川・須恵川・多々良川などの中小河川の沖積作用によって形成された沖積平野と、油山北部台地・鴻巣丘陵や、諸岡台地、粕屋台地などの丘陵・台地部とによって形成された平野である。この平野はまた地域的に西から早良平野、福岡平野、粕屋平野に細分され、ここで言う福岡平野は那珂川と御笠川、月隈丘陵に囲まれた部分を指す。

比恵遺跡群はこの狭義の福岡平野の北側、那珂川と御笠川に挟まれた標高5～11mを測る平坦な洪積台地上に立地する遺跡である。この台地は阿蘇起源とされるASO－Ⅳ火砕流によって形成されたものである。ただ現在見られる平坦な地形は昭和10年代に行われた区画整理によって削平された結果であり、本来は台地を開析する小河川による入り組んだ谷と台地という景観を呈していたものと思われる。

比恵遺跡群の調査では旧石器時代から古代にかけての各時期の遺構が確認されている。また、遺跡周辺の歴史的環境については紙面の都合もあり、ここでは述べないが、比恵遺跡群内に於けるその他数多くの調査報告書を始め、周辺遺跡の調査報告書などに、その概要が詳しく述べられているので、それらを参考にされたい。

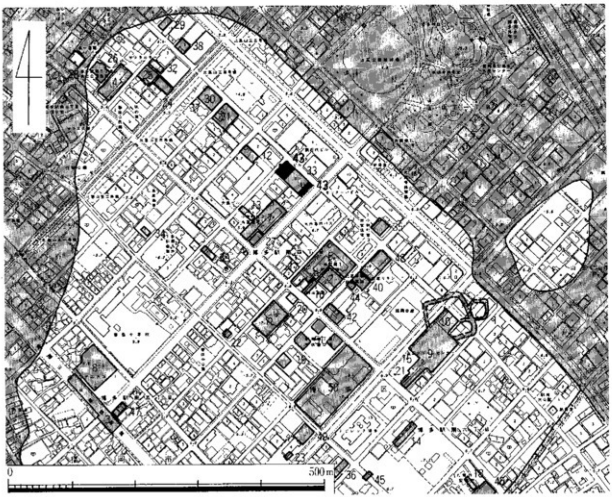


Fig. 2　第43次地点位置図（1/6,000）

第3章　調査の記録

1．調査の概要（Fig. 3, PL.1－①～③）

第43次地点は、南東から北西に長軸を取る長さ約1km、幅0.7kmの範囲の比恵遺跡群の、北東側に位置する。周辺の調査地点としては、第43次地点に挟まれた第33次地点以外には、北側に第12次地点、西側に第13次・7次地点、南側に第26次地点などがある。発掘調査は1992年8月21日に重機による表土の除去作業から開始し、排土は場内で処理した。調査は既に調査済の中央部の北側をⅠ区、南側をⅡ区として行った。調査面積はⅠ区306㎡、Ⅱ区48㎡の合計354㎡である。遺構面までの深さはⅠ区で70cm、Ⅱ区で120cm程で、盛土整地層の下に水田土があり、その下が遺構面の橙色から黄褐色のローム土である。包含層はなかった。調査区には以前倉庫が建てられていたが、厚い盛土の上からコンクリートの布基礎だったため、独立基礎の部分を除いて掘削が遺構面まで達しておらず、遺構の残りは良好であった。検出した遺構は弥生時代中期の竪穴住居址が8軒、弥生時代後期は竪穴住居址が4軒、井戸址13基、古墳時代は土坑2基、掘立柱建物2棟である。遺物は竪穴住居址や井戸を中心に多量に出土している。大半が弥生時代のもので、住居址からは鋳型片や鉄器類、玉類など、井戸からは木器・建築材などが出土している。

2．調査の記録

掘立柱建物

SB111（Fig. 4,PL.1－④）

Ⅰ区の南西側で検出した2×2間の主軸をN－14°－Eに取る総柱の建物。規模は南北3.11～3.19m、東西は2.70～2.86m、床面積は8.76㎡を測る。柱穴掘方は円形または楕円形で比較的大きい。柱径は痕跡から20cm前後である。埋土は黄褐色地山ロームブロックを主体とし、黒褐色粘質土を混入する。

出土遺物（Fig. 4）　各柱穴から弥生土器や土師器の破片が出土している。須恵器をわずかに含み、時期的には古墳時代後期の時期であろう。1はP8出土の須恵器の坏身1/8片で、復元口径は11cmを測る。2はP7出土の弥生時代の土製の投弾である。全長4.0cm、最大径2.3cmを測る。

SB112（Fig. 4,PL.1－⑤）

Ⅰ区西側境界地で検出した2×2間の総柱と考えられる建物。主軸はN－107°－Eに取る。規模は南北3.41m、東西3.71m、床面積は12.65㎡を測り、SB111よりやや大きい。柱穴掘方径は50～70cm位で四隅がやや深く、穴も大きい。柱径は痕跡から16～20cm位である。埋土は地山ロームブロックと黒褐色粘質土を主体とする。倉庫建物である。

出土遺物　各柱穴から弥生土器を中心とする遺物が出土しているが、須恵器の細片を2点含む。

SB113（Fig. 4）

1×2間の主軸をN－30°－Wに取る建物。規模は南北3.80m、東西2.80m、床面積は10.64㎡を測る。柱穴掘方は円形または楕円形で、直径は40～50cmを測るが、深さは5～20cmと浅く、残りは悪い。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物　各柱穴から弥生土器の細片が少量出土しているが、図示出来るものはない。

竪穴住居址

Ⅰ区で検出した。軒数は推定で最低で12軒を数えるが、その内第33次地点にまたがる住居が3軒ある。SC66・85・114は調査時には3軒以上の切り合いを確認していたが、その後の図面の整理によっ

て建て替えも含めて最低6軒が考えられる。ただ机上の復元のため、やや確実性に欠ける。

SC02（Fig. 17）

第33次地点との境で検出された、台形状を呈す住居址。規模は復元で長辺5.4ｍ、短辺で3.4ｍを測る。残りは悪いが、片側にベッド状遺構を残す。主柱穴は2本。遺物の出土は少なく、詳細は第33次の報告に委ねるが、第33次調査の所見では弥生終末頃とされる。

SC65（Fig. 5,PL.1－④）

南西境界隅で検出した円形住居址と思われるものの一部。SB111に切られる。残りは悪く、殆ど床面を残すのみである。内部に直径約1ｍの円形で、焼土・炭化物を有す浅い土坑がある。主柱穴は不明。また、南壁沿いには長方形の規模90×60㎝、最大深さ43㎝の土坑SK90がつく。

出土遺物（Fig. 5）　弥生土器の細片らしきものが、少量出土している。時期を決めうるものはないが、1点床面出土の小片を図示する。3は壺の頸部1/4片で、頸部径は推定で9.4㎝位か。外面から口縁内面はタテハケ、内面はナデ。4は柱穴出土。甕の口縁1/6片で、復元口径16㎝を測る。

SC66（Fig. 6,PL.2－①～③・⑤）

SC85に切られ、SC114を切る南北にやや長い不整円形状の住居。規模は短径7.26ｍ、長径は8.25ｍを測る。遺構の残りは良く、壁高は30㎝を測る。主柱穴は推定で9本と考えられる。柱穴は切り合いがひどいが、円形または楕円形で、大きく深くしっかりしている。主柱穴間の距離は143～258㎝を測る。中央部には楕円形状の土坑（SK106）がある。土坑の規模は150×90㎝、深さは約50㎝を測る。土坑はピットで切られるが、SC115を切っている。壁溝は部分的に北西壁下部分に認められた。床は貼り床されており、貼り床を撤去すると西側を中心に溝状に落ち込む部分が認められた。焼土面が5か所ある。その部分がかまであろうか。床面には中央土坑周辺に土器の破片がまとまって出土している。

出土遺物（Fig. 8・9・13～16,PL.5）　埋土中から弥生中期の土器を中心に多量に出土した。土器のほかは石器、投弾などの土製品、玉類、鉄斧、鋳型片（上層出土）、銅滓などがある。上層部分については住居の重複が不明だったため混ざっている可能性がある。

5～7は壺。5は鋤先状口縁1/3片で復元口径20.5㎝を測る。器表の磨滅・剥落はひどいが口縁内外面丹塗り。6・7は胴部片。6は扁球で最大径は上半にある。7は1/3片で最大径が下半にある。6・7は磨滅がひどいが、7の外面は丹塗り。胎土は5・6が砂粒を多く含む。6は焼成は良い。8～30は甕である。8～20は口縁部片。口縁の屈折が逆「L」字状で水平に近いもの8～12、「く」字状に近いもの13～20に分けることが出来る。8～10は小型のもので、8は1/6片で19.4㎝、9は1/6片で15.2㎝、10は小片で19.4㎝を測る。外面の調整はハケ、内面はナデ。11は中型の1/4片で、復元口径31㎝を測る。磨滅がひどく調整不明。胎土は粗砂を多く含む。12は鉢の可能性もある。1/6片で復元口径34.5㎝を測る。内外面は磨滅するが、外面はタテハケ。胎土に砂粒と赤色粒子を多く含む。13～16は小型の甕。1/6片・1/6片・1/6片・1/2片で、復元口径は16㎝・18.2㎝・23㎝・20.2㎝を測る。いずれも磨滅がひどく、調整は不明。16は内面に指押さえ痕が残り、外面はタテハケ。14の胎土に粗砂を多く含む。16の外面に煤が残る。17～20は中型の甕。いずれも1/6片で、19は全周する。口径は27㎝・27.8㎝・30.4㎝・34.5㎝を測る。17は外面ハケ、内面ナデで指押さえ痕が残る。18は磨滅がひどく調整不明。19は外面タテハケ。20は磨滅し、調整は不明だが、二次的加熱を受けたのか赤変し、口縁に煤が残る。19・20は粗砂を多く含む。21～30は底部片。21～24はやや上げ底のもの。21は8.4㎝、22・23は1/2片で復元底径9.5㎝、8.6㎝、24は8.3㎝を測る。21は外面ハケ、その他はナデ、22は調整不明だが、内面指押さえ痕が残る。23は磨滅するが、外面ハケ、内面ナデ。24は器表の剥落・磨滅がひどいが、内面に工具痕が残る。21・23は砂粒を多く含み、24は粗砂を含むが精良で黒斑がある。25

Fig. 3　遺構全体図（1/200）

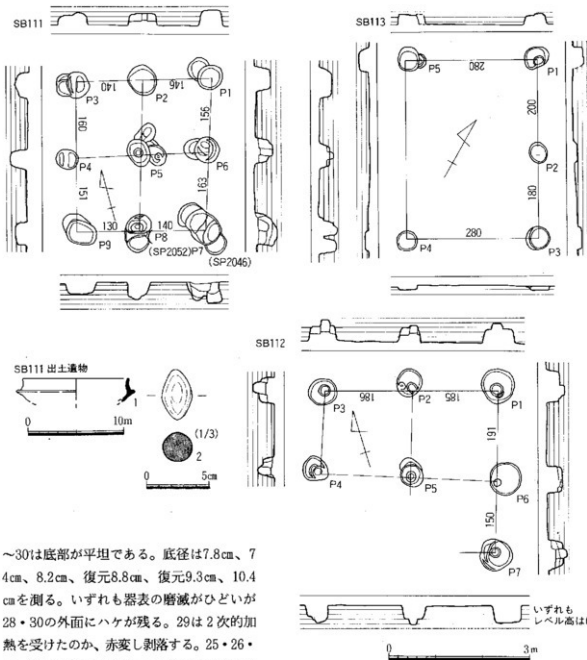


Fig. 4　掘立柱建物と出土遺物（1/80、1/4、1/3）

～30は底部が平坦である。底径は7.8cm、7.4cm、8.2cm、復元8.8cm、復元9.3cm、10.4cmを測る。いずれも器表の磨滅がひどいが28・30の外面にハケが残る。29は2次的加熱を受けたのか、赤変し剥落する。25・26・28～30は粗砂を多く含む。31は甕形土器胴部1/4片。2条の突帯が巡る。外面は剥落するがナデか。32は甕棺の口縁1/10片。復元で48.2cmを測る。外面はナデ。焼成は良い。33～35は器台。磨滅がひどいが、指押さえ仕上げである。33は脚部の可能性もあるが、受部とした。35は支脚片か。36は鉢の小片で復元口径16.4cmを測る。器表は磨滅するが、内面はナデ、胎土は精良。37は蓋1/6片で復元口径16.7cmを測る。内外面丁寧なナデ。1対の直径8mmの焼成前穿孔の円孔がある。焼成は良好。62は土製の投弾。紡錘状を呈し、断面は円形。全長4.1cm、最大直径2.3cmを測る。黒褐色を呈し、研磨されている。胎土は精良。

66～75は石器・石製品。66は石剣の基部片。残存長6cm、最大幅4cmを測る。全面研磨されている。67は石鏃の未製品の一部か。残存長7.4cm、幅4.7cmを測る。石材はいずれも砂岩。68は柱状片刃石斧の小破片。69は太形蛤刃の磨製石斧を転用した敲石。基部に敲打使用痕が明瞭に残る。刃部は欠損している。全長13.4cm、最大幅5.6cmを測る。石材は黒灰色の安山岩か。70は不整楕円形状の磨石。全

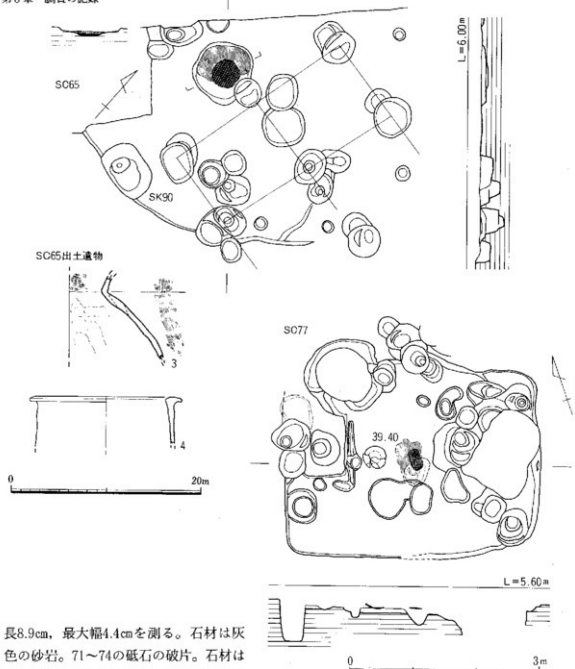


Fig. 5　SC65・77とSC65出土遺物（1/60、1/4）

長8.9cm，最大幅4.4cmを測る。石材は灰色の砂岩。71～74の砥石の破片。石材は71・73が鋳型に使われる石材か、72・74が砂岩。75は滑石製の大型の九州型石錘の破片。「く」字状に通る紐通しの孔がある。86は磨製石鏃。先端はやや欠損する。鏃長2.5cm、幅1.7cmを測る。色調は淡緑灰色を呈する。87は凹基の黒曜石製の剥片鏃。全長2.1cmを測る。90は暗緑色のガラス玉の破片。全長4㎜、直径4㎜を測る。91は碧玉製の管玉。暗緑色を呈す。全長8㎜、直径3㎜、孔径1㎜を呈す。

95は小型の袋状鉄斧である。全長6.4cm、刃幅3.3cmを測る。鍛造と思われるが、全体に錆がひどい。埋土中層出土。

99は現状で長さ3.8cm、幅3.6cm、厚さ3.27cmの銅戈両面鋳型小破片である。胡の残存部が大きい方をA面とする。A面を表にし、内を下に胡を上にした状態で、上端部は両面の胡部分で折れたまま、右側も折れたままで、左側面は折れた所を砥石に転用し平滑な面になっている。下端部は多少磨滅しているが、本来の面がほぼ残るようである。A面とB面は平行せず、厚さは右側が左側より多少薄い。

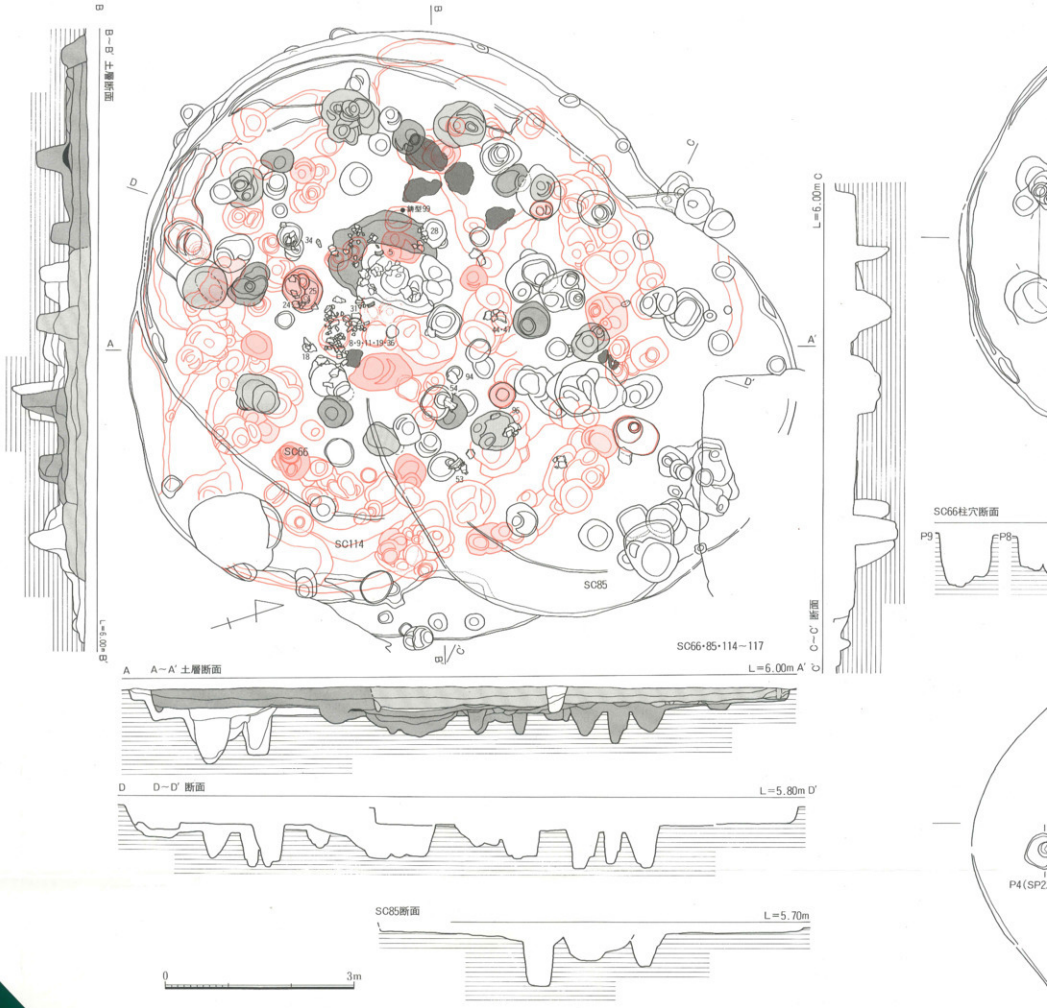


Fig. 6 SC66・85・114～117 (1/60)

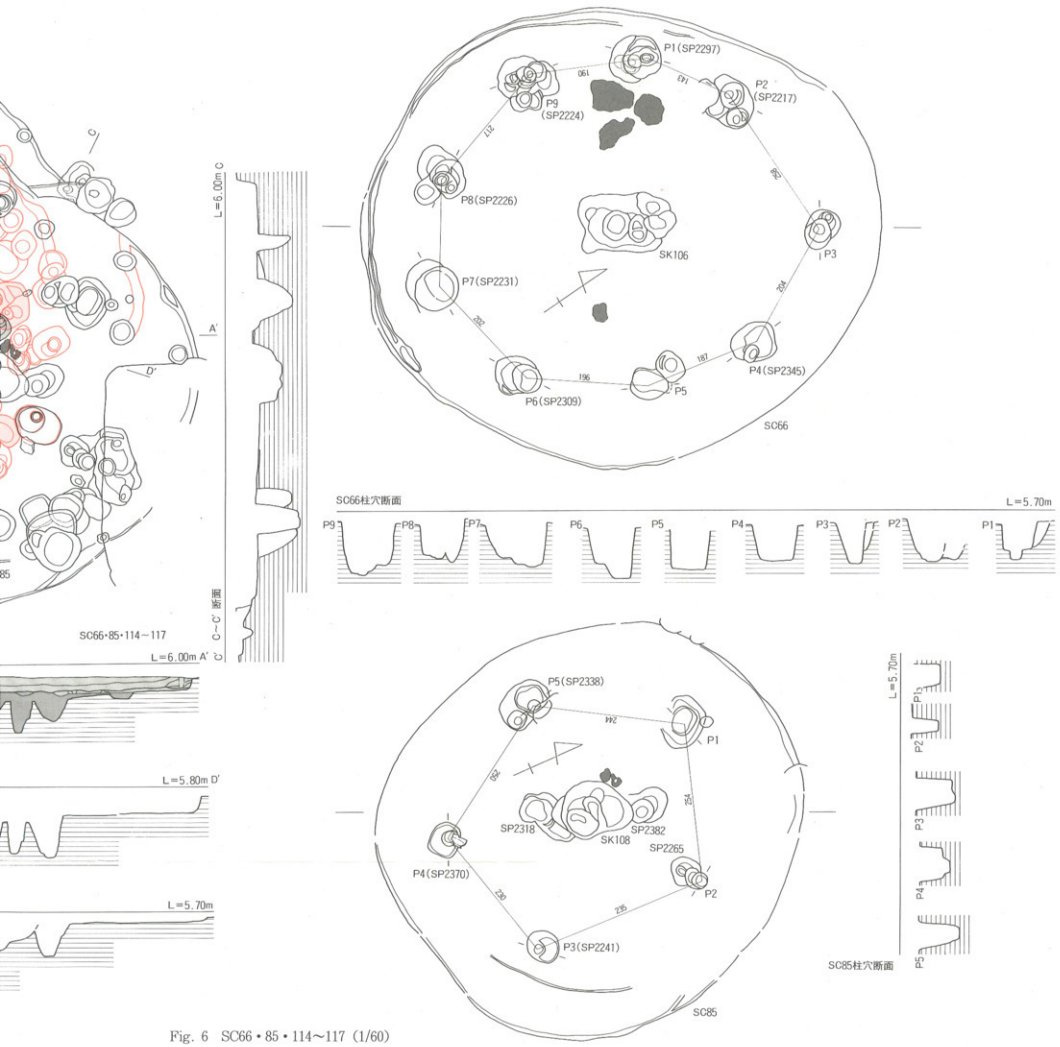
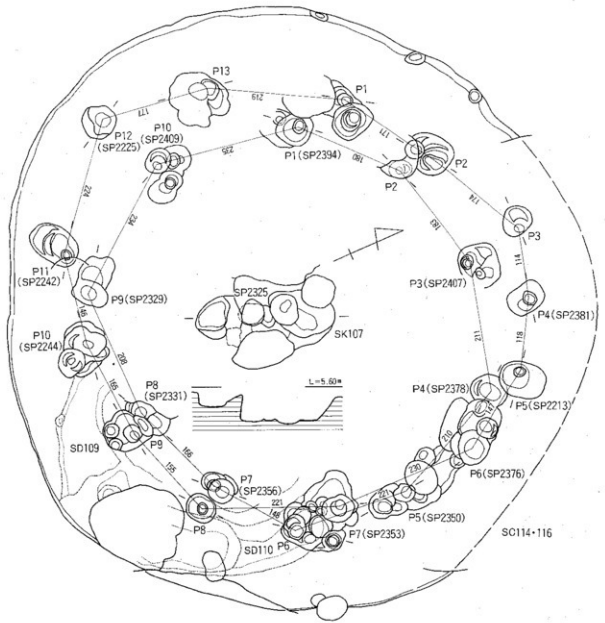
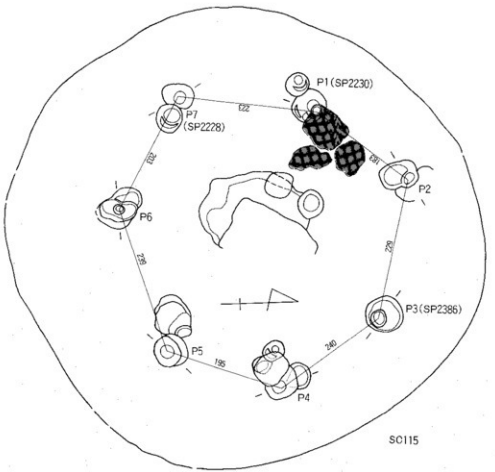
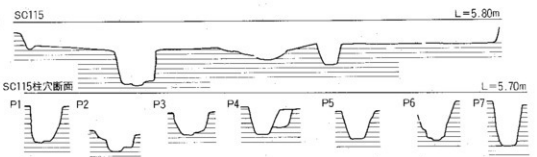
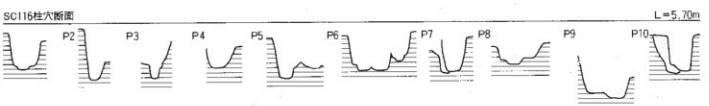


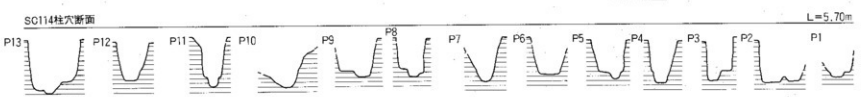
Fig. 6 SC66・85・114～117 (1/60)

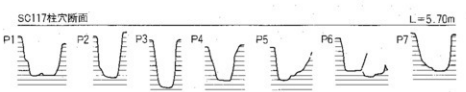












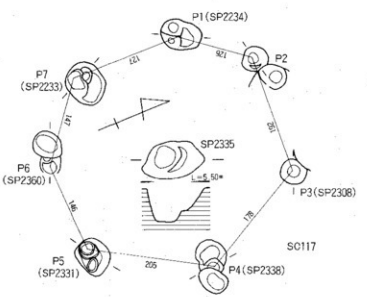


Fig. 7 SC114～117 (1/60)

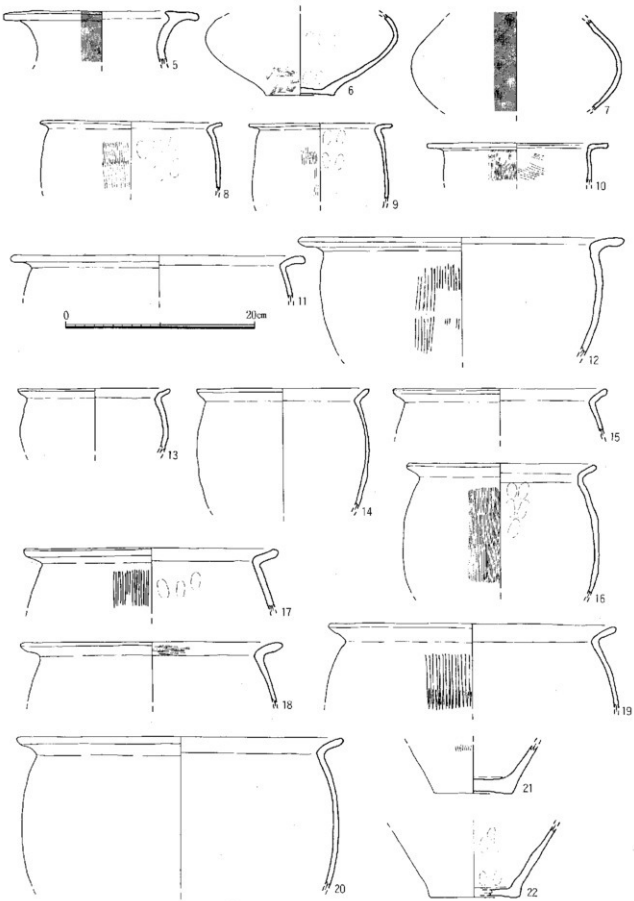


Fig. 8　SC66出土遺物Ⅰ（1/4）

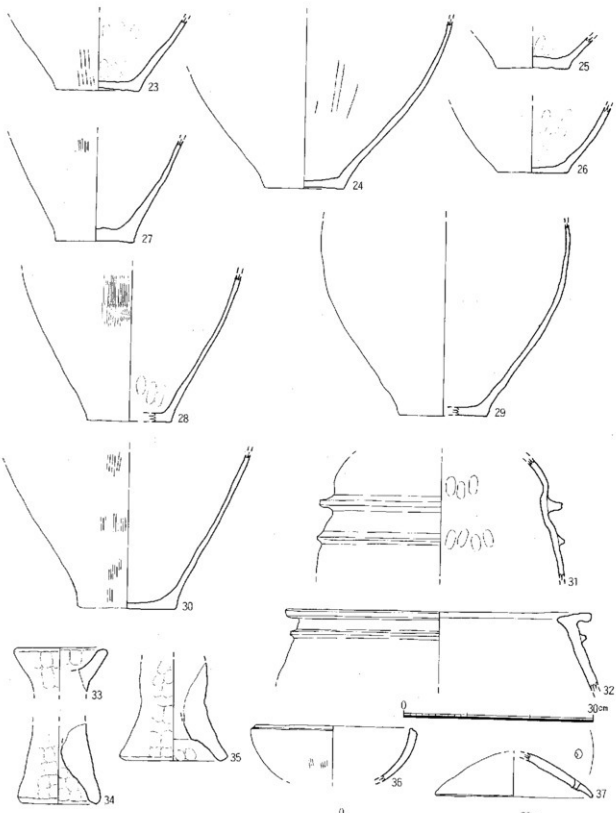


Fig. 9　SC66出土遺物Ⅱ（1/4、1/6）

A面には銅戈型の内と胡の一部が残る。型の縁は磨滅して丸く、型の部分は溶銅で焼けて黒灰色に変色しているが淡い。内は右側1/2近くが残り、残存幅1.1cm、全長2.5cm、彫込みの深さ0.15cm弱。上端

面は胡の一番深い所に沿って折れ、胡の深さは1.1cm、残存幅3.2cm。胡の傾きは右下がり。内の幅は2～2.5cm、胡の幅は11～11.5cmと推定され、この銅戈型式は中細形としてよい。(鋳型における中細銅戈の胡長は10～12cm強である)。B面も内と胡の一部が残り、型の縁は著しく磨滅している。内は残存幅0.8cmほど、全長2.8cmほど、彫込みの深さ0.1cm。内の縁はA面とは異なり、一段深く溝を彫っていたようで(製品の内両側に突線状の高まりが生じる)、今はあいまいな溝状になっている。胡は深さ1cm弱、残存幅1.3cm弱。傾きは残存部が小さく断定は出来ないが左下がりか(もしそうなら那珂八幡古墳出土銅戈鋳型と同じく胡の傾きが表裏で逆)。残った大きさからこれも中細形と推定出来る。胡と内の部分は焼けて真っ黒に変色したうえ、内の外側の残存鋳型面全面までもが焼けて黒くなっている。この部分がこれほど広く焼けた銅戈鋳型は珍しい。その黒色の度合いは型部分より当然薄いが、A面の型部分よりは濃い。石材は北部九州の大多数の鋳型と共通し、灰白色で表面がややざらつき、石英長石斑岩とよばれるものに似る。100は銅滓である。全長3.2cm、最大幅2.5cm、厚さ1.4cm、重さ12.5gを測る。緑青がひどい。99・100はいずれも埋土上層で遺構に伴うものではない。

101～106は中央土坑のSK106出土。101・102は甕の口縁部片。101は1/6片、102は1/8片で、復元口径は21cm、27.8cmを測る。101は磨滅がひどく調整不明、102はナデ。103～106は底部片。103は壺で、底径10.5cmを測る。わずかに上げ底。104～106は甕の1/2片、3/4片、底部片で、底径10.5cm、8.5cm、9.5cmを測る。外面の調整はハケ。内面はナデ。110は柱穴出土。甕の口縁1/4片。復元口径26.3cmを測る。磨滅するが、外面はハケ。118～120・122はピット出土。118・119は甕の1/8片、1/6片で、復元口径30.7cm、26.6cmを測る。119は跳ね上げ口縁。120は大型の荒砥石。全長14.9cm、幅11cmを測る。上下面、右側面が砥面。石材は花崗岩。122は土製の投弾。全長4.1cm、幅2.3cmを測る。全体丁寧な研磨。

SC77(Fig. 5,PL.2－⑦・⑧)

SC85を切る長方形の小型住居。SE68、89、SK84に切られるが、規模は長辺4.08m、短辺3.15m、床面積は12.85㎡を測る。壁の残りは悪く10cm余りである。主柱穴は2本で西側では壁際にある。北西コーナーは一部高くなり、ベッド状を呈す。炉址は中央に焼土面が残り、その部分であろう。焼土面の西側には高坏の坏部が置かれていた。床面は貼り床されている。

出土遺物(Fig. 10,PL.5)　弥生土器がコンテナ1箱出土している。図示出来るものは少ない。38は壺の頸部片。磨滅がひどく内外調整は不明。39・40は大型の高坏の坏部片。38は1/3片、39は一部欠で口径復元30.4cm、32cmを測る。いずれも磨滅がひどいが、内外面ハケのちナデ、38・40は外面丹塗り痕が残る。41は軽石製の浮子で全長5.3cm、最大幅5.2cm、重さ29.1gを測る。色調は黒褐色。雑な削りで、底部は丁寧な削り。紐掛けの削りが残る。

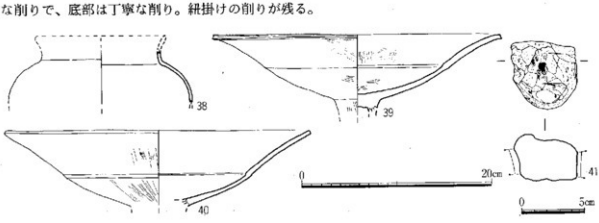


Fig. 10　SC77出土遺物(1/4、1/3)

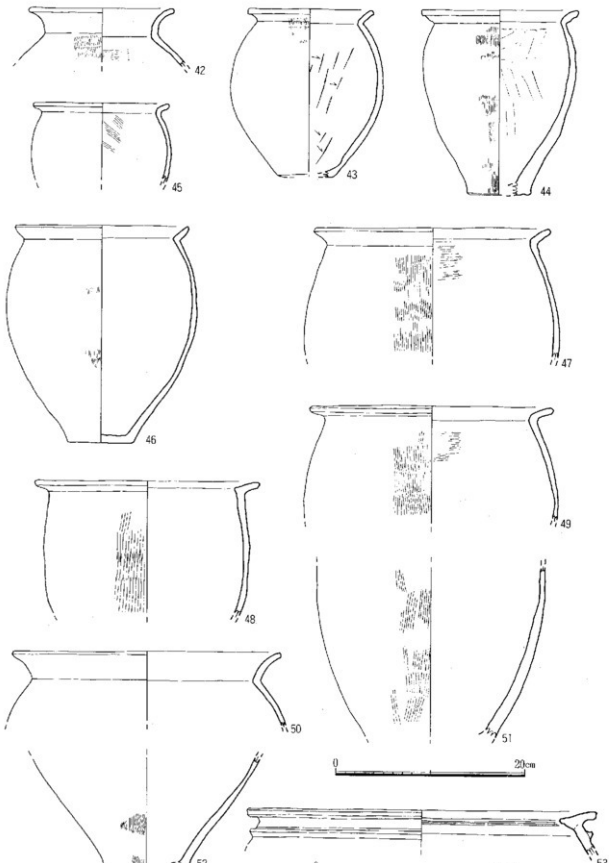


Fig. 11　SC85出土遺物（1/4、1/6）

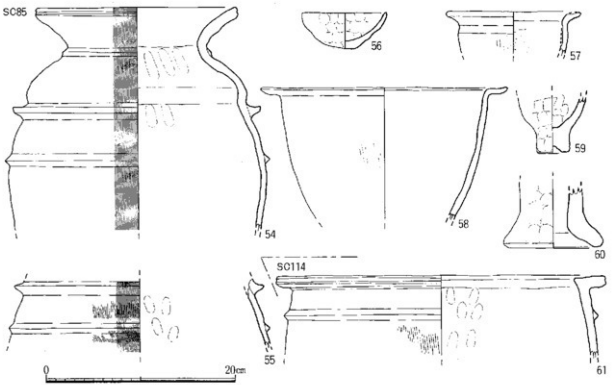


Fig. 12　SC85・114出土遺物（1/4）

SC85（Fig. 6,PL.2－①・④）

SC77に切られ、SC66・114などを切り、切り合い関係では一番新しい。平面は不整の円形を呈し、規模は直径6.87mを測る。残存壁高は約20cmを測る。中央に楕円形状の土坑があり、その周囲に主柱穴が5本巡る。主柱穴間距離は230～254cmを測る。中央土坑（SK108）のそばには焼土面がある。南東側にベッド状の一段の高まりがある。住居の建て替えの可能性もあるが、明確に対応する柱穴は認められない。床面は粘土が張られているようだ。中央土坑の両端には1対のピットがある。しかし東側のピットは土坑に切られた状態で検出されており、やや疑問も残るが、一応松菊里型の住居址の可能性があり、一番新しい時期の例かもしれない。床面から鉄斧などの遺物が出土している。

出土遺物（Fig. 11～15,PL.5）　埋土中、床面から多くの遺物が出土しているが、主なものについて述べる。42・43は壺である。42は口縁1/6片で、復元口径15.3cmを測る。口縁が大きく外反する器形で、器表はやや磨滅するが、胴外面はタテハケ、内面はヨコハケ。43は底部を一部欠失するが、口径13cm、復元底径6cm、器高17.8cmを測る。外面ヘラケンマ、頸部にハケが残る。内面はヘラ状工具のナデ。43は胎土と焼成は良い。44～53は甕。44～50は「く」字状を呈す口縁部片。44は1/3片で、復元口径16.6cm、器高19.5cmを測る。45は1/3片で復元口径14.5cmを測る。全体に磨滅するが、内面にハケが残る。外面黒斑がある。46は1/2片で復元口径18cm、器高23cmを測る。器表の剥落・磨滅がひどいが、内面に指押さえ痕が残る。47～50は1/2片、1/4片、1/6片、1/6片で、復元口径は25cm、23.6cm、26.6cm、25.6cm、28cmを測る。器表の磨滅はひどいが、外面はハケ。胎土は45～47・50が砂粒を多く混入する。47は外面に煤がつくのか。51は胴部1/3片。器表の剥落・磨滅がひどく、外面にハケが残り、煤がつく。52は底部1/2片で復元底径9cmを測る。磨滅がひどく、外面ハケがわずかに残る。53は甕棺1/6片。復元口径55cmを測る。口縁直下に1条の突帯が巡る。53の焼成は良好。54・55は瓫形土器。54は口縁から胴部1/2片。55は胴部1/6片。54は胴部に2条。頸部に1条の突帯が付き、口縁は開く器形で、復元口径は21.2cmを測る。器表の剥落・磨滅がひどいが、丹塗りで内面には指押さえ痕

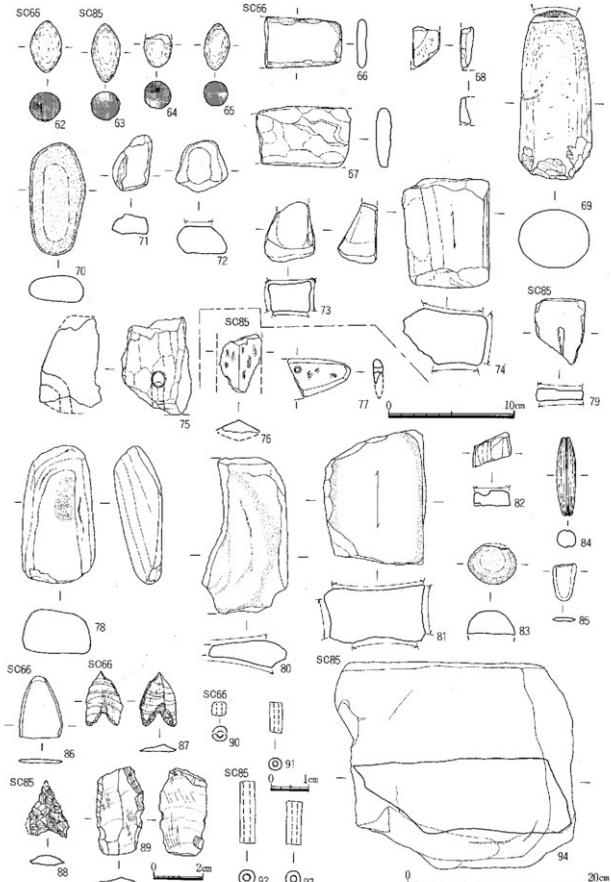


Fig. 13　SC66・85出土遺物（1/3、2/3、1/1、1/4）

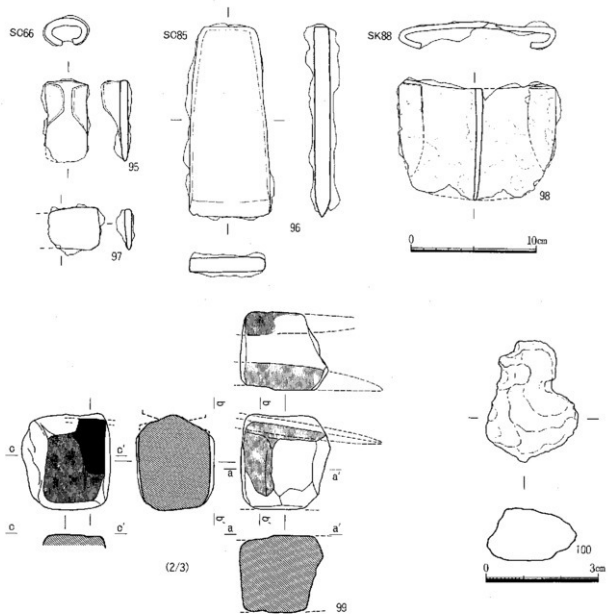


Fig. 14　各遺構出土鉄器・鋳型・鋼滓（1/3、2/3、1/1）

が残る。55は2条の三角突帯が巡り、外面は丹塗りで丁寧なハケ、内面は指おさえとナデ。54は胎土・焼成は良い。56～58は鉢。56は口縁1/3次の手ずくね土器の鉢。いびつで口径9cmを測る。57・58は短い「く」字状の口縁を持つ形態で、57は1/6片、58は1/4片、復元口径は14.3cm、26cmを測る。57は成形が雑、58は器表の剥落・磨滅がひどいがハケか。56の焼成は良好。57・58ともに胎土に粗砂を多く混入する。59は小杯状の土器である。磨滅がひどいが内外指押さえ痕が残り、二次的加熱を受けている。60は器台か支脚の脚部片で脚部径10.6cmを測る。磨滅がひどいが、指押さえ仕上げ。胎土に砂を多く含む。63～65は土製の投弾。いずれも紡錘形を呈し、64は1/2片である。長さは63が4.6cm、64が2.5cm、65が3.7cmを測る。

76は磨製の石剣か石戈の破片。断面は菱形を呈し、刃幅は推定で3.5cmを測る。淡黒色の粘板岩。77は石包丁の1/2片。全面研磨で、石材は黒褐色の輝緑凝灰岩。78は玄武岩製の敲石。下端部は使用により欠損する。全長10.9cmを測る。79～82は砥石片。79は小型で上下両面、80も上下両面、81は上

ド・両側面が、82は小型で上面が砥面として使用されている。82は深い溝状の使用痕が残る。いずれも砂岩か。83は全面がツルツルに磨られた石球の1/2片。直径は3.8×3㎝以上を測る。84は滑石製の有溝石錘。全長6.1㎝、直径1.4㎝、重さ19.5ｇを測る。85は不明の磨製石製品。石材は砂岩。88は黒曜石の石鏃。先端と基部を欠失する。現存長2㎝を測る。89は黒曜石のスクレーパー。剥片を利用したもので風化が著しい。上端が潰れ、左側面、右側面上半に刃部を作り出すが、右辺の調整は左辺に比べて、風化は受けていない。当時表採してきたものを再加工したものか。全長3.5㎝、幅1.8㎝を測る。92・93は碧玉製の管玉。全長は92が1.6㎝、93は1.1㎝を直径0.4㎝を測る。94は方形を呈す床面出土の台石。規模は24.5×22㎝、最大厚7.9㎝を測る。石材は黄褐色を帯びた花崗岩である。

96は板状の鉄斧。長方形を呈し、両刃の刃が付く。全長15㎝、刃幅6.4㎝、上端幅4.2㎝、厚さ1.2㎝を測る。全面錆がひどく、鋳造か鍛造か不明。97は鎌と思われる破片。残存長4.0㎝、刃幅3.4㎝を測る。96は床面、97は下層出土。

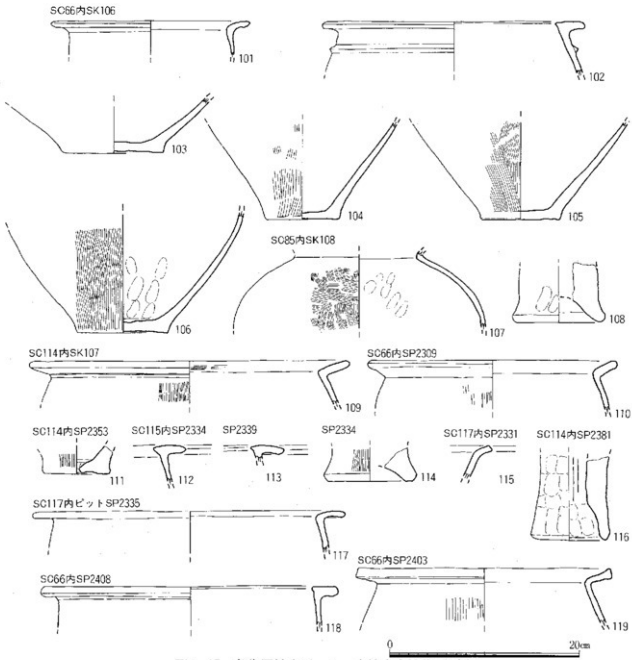


Fig. 15　各住居址内ピット、土坑出土遺物（1/4）

107・108はSK108出土。107は壺胴部1/6片で、外面はやや磨滅するがハケ。内面はナデで、指押さえ痕が残る。108は支脚の脚部1/3片。復元脚径9.8cmを測る。磨滅するが、指仕上げか。

SC95

調査区西壁中央で、SC85・66に重なる住居址。残りが悪く床面粘土が残るだけであり確実な住居址とは言いがたいが、可能性として上げておく。主柱穴、壁溝などはっきりしない。ただ、床面粘土の有り方から見て、SC77と同一方向であろうか。

SC114（Fig. 6・7,PL.2－②・⑥）

SC66・85に切られる平面は不整円形状を呈す住居址。規模は9.17×9.6m（推定）を測る。土坑（SK107）を中心に13本の主柱穴が114cm～230cmの間隔で巡るが、その間隔は

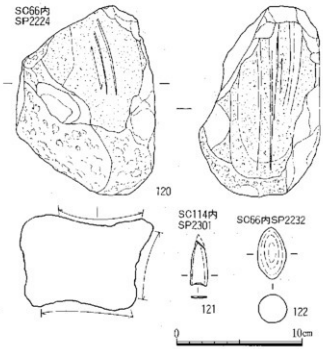


Fig. 16　SC66・114内ピット出土遺物（1/4、1/3）

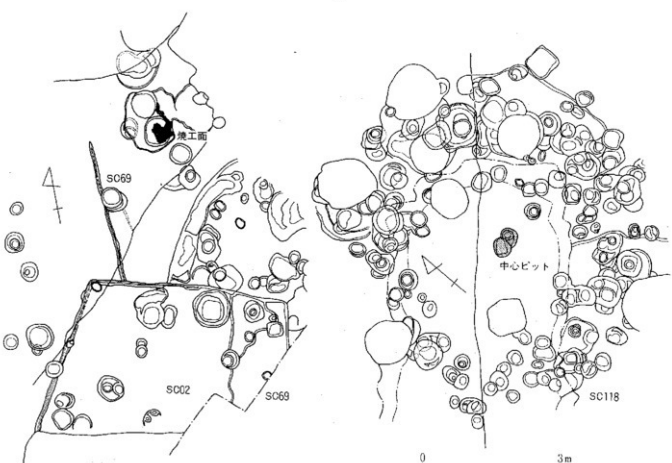


Fig. 17　第33次地点境界地にかかる住居址SC69・118（1/80）

かなりばらつきがある。柱痕跡が残るものもあり、それから復元すると柱径は15cm前後か。床面は後代の住居に切られ、焼土の残る炉址ははっきりしないが、床面を掘り下げると南側の壁沿い（SD109）と東側の壁沿い（SD110）に溝状の落ち込みが見られる。特にSD110はプランが円弧状を呈し、断面はU字形を呈し、深さも最大60cmを測りしっかりしている。住居を作る為の床下の基礎地業によって、作られたものか。

出土遺物（Fig. 12・15・16）　埋土中から弥生土器片が出土しているが、SC66・85に切られるため、取り上げた遺物は少ない。

61は甕の口縁部1/10片で復元口径は48.2cmを測る。口縁は逆「L」字形を呈し、口縁下に1条の三角突帯が巡る。器表はやや磨滅するが、外面ハケ、その他はナデ。109はSK107出土。甕の口縁1/6片で、復元口径33.8cmを測る。「く」字状の口縁で外面ハケ。111・121は柱穴出土。111は上げ底の甕底部1/3片。底径6.8cmを測る。116は床面ピット出土の支脚脚部片。脚径8.2cmを測る。121は粘板岩製の磨製石鏃。先端を欠失する。残存長3.5cm、幅1.4cmを測る。全面丁寧な研磨。

SC115（Fig. 7,PL.2－③）

SC66と重複し、中央土坑が切られる住居址。主柱穴は7本でSC66より2本少なく柱間隔は183～240cmを測る。主柱穴の円周はSC66に比べひとまわり内側にあり、住居の規模も小さいかもしれない。主柱穴の主軸はSC66とずれており、棟方向、入口方向も異なるのであろう。66との先後関係は切り合い関係、柱穴が焼土面下から検出していることから115が66より古い住居である。

出土遺物（Fig. 15）　112～114は柱穴出土。112・113は逆「L」字形の甕の口縁部細片。114は器台か支脚の脚部1/5片。復元脚径9cmを測る。

SC116（Fig. 7,PL.2－③）

SC114と中央土坑を共有する住居址である。主柱穴は10本でSC114より4本少なく、柱穴間距離は148～234cmを測り、しかも内側に巡る。柱穴は重複が激しく、底面にいくつか柱痕跡が残るものもあり、建て替えがあったと考えられる。先後関係は遺構の重複からみて、SC114より古い。住居址の規模としてはひとまわり小さいのであろうか。柱穴から図示出来る遺物の出土はない。

SC117（Fig. 7）

SC114の中央土坑SK107と切り合う小土坑SP2335を中心として主柱穴が7本巡る。主柱穴間の距離は126～205cmを測る。住居の規模は平均的な柱間隔の有り方から推定して6m以内であろう。柱穴から遺物が出土した。

出土遺物（Fig. 15）　115は鉢の細片、117は甕の口縁部1/8片で、復元口径88cmを測る。

このほか隣接する第33次地点との境界で、2軒住居址らしき遺構が確認されている。1軒はSC02と切り合う方形住居址（SC69）で、周壁溝と焼土面のみを検出した。主柱穴は不明。もう1軒は中心のピットを基準に円形状に巡る柱穴群（SC118）で、弥生時代中期の円形住居址か。2回は建て替えられているのか。以上2軒の詳細な分析については第33次の報告に委ねたい（Fig. 17）。

井戸

Ⅰ区で11基、Ⅱ区で2基検出した。内部からは多量の土器類のほか、木器類や種子などが出土している。また下層から底の部分から完形の土器が1～4個体程出土した。土器の保存状態は良い。

SE68（Fig. 18,PL.3－①）

SC77の北西側で検出した住居址を切る円形の井戸。上面の規模は135×127cm、深さ170cmを測る。素掘りの井戸で、底は先すぼりする。上面では一部抉れる部分があるが、途中の壁面での抉れは上面から140cm下程で一部見られる。埋土は黒褐色粘質土で下層程粘性が強くなる。湧水が少しあった。

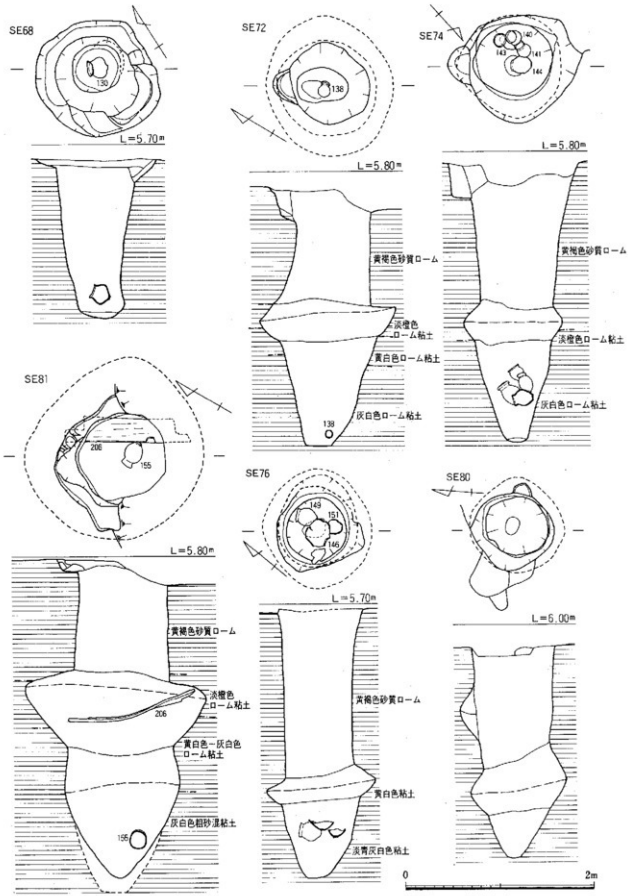


Fig. 18　SE68・72・74・76・80・81 (1/40)

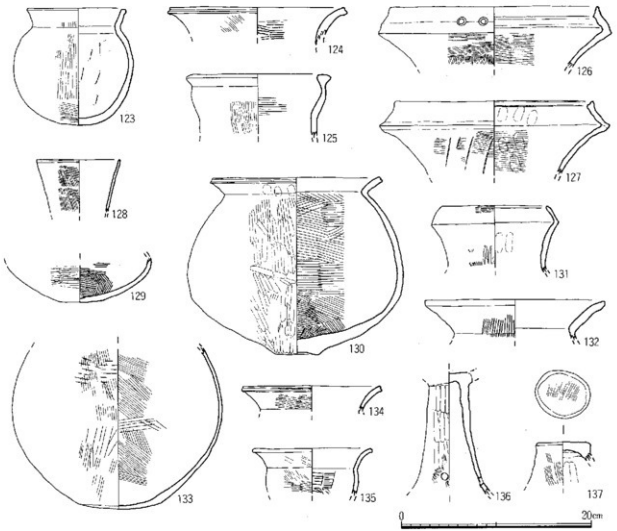


Fig. 19　SE68出土遺物（1/4）

底から少し浮いた状態で完形の土器130が出土した。

出土遺物（Fig. 19,PL.5）　123～133は壺。123は1/3現存の小型の口径と胴部径がほぼ同じで、口縁が直立気味の「く」字形、底部が丸底を呈す。復元口径12.3cmを測る。外面はタテハケ、内面ナデで工具痕が残る。124は口縁1/5片。復元口径18.5cmを測る。口端部は凹線状に窪む。やや磨滅するが、内外面ハケ。125は口縁部1/4片、復元口径15.3cmを測る。口端部は断面三角状に肥厚する。器表はやや磨滅するが、内外面ハケ。126・127は複合口縁で、それぞれ1/2片、1/6片、復元口径22cm、21cmを測る。口端部はやや凹む。126口縁外面には2個の竹管文を加える。口縁部内外面はハケとナデ。128は直口壺の口縁部1/4片。復元口径8.8cmを測る。外面細かいハケ、内面ナデ。129は扁球状の胴部を持つ底部片で、小さな平底を持つ。外面ヘラケンマ、内面ハケ。130は完形品で下膨れ胴部を持つ広口のもの。口端部には浅い凹線が巡る。口径17.3cm、底径4.5cm、最大胴径22.5cm、器高18.8cmを測る。外面ヘラケンマ、内面ハケで底部には右回転にハケを施す丁寧な調整。底部は小さくやや上げ底。131は袋状を呈す、複合口縁の口縁部片。口径11.2cm。外面細かいハケ。132は1/3片で、復元口径19cmを測る。形態から甕の可能性もある。133は凸レンズ状の底部を持つ球状の胴底部1/3片。最大胴径22cmを測る。器壁は薄い。外面ハケのちナデ、内面はハケ。134・135は鉢の口縁部片。それぞれ1/3片と細片で、復元口径14.5cm、12.6cmを測る。調整はナデとハケ。136は高坏脚部片。外面ヘラナデ、

内面はナデ。透かし孔が3カ所ある。137は支脚底部片。天井部は楕円形を呈す。胎土は128～131が精良。123・124・127～134は底、125は上層、126・135は下層、136・137は抉れ部出土。

SE72（Fig. 18,PL.3－②）

北東側で検出した円形の素掘りの井戸。規模は上面で89×76cm、深さは275cmを測り、八女粘土まで掘り込んでいる。壁面には上面から125cm前後で周囲が深く抉れている。上面には北側で一部40×20cm、深さ31cmの半円形の段落ち状のピットが付く。井戸の埋土は黒褐色粘土で下の方ほど灰味を帯び、粘性が強く泥土となり、湧水がひどい。底から壺が1点出土した。

出土遺物（Fig. 20,PL.5）　138は袋状を呈す壺で底から出土。口縁部は意図的に打ち欠いてある。口径8cm、底径6.2cm、器高15cmを測る。全体に粗雑な造りで質量感がある。外面は雑なハケとナデ、内面はナデ。139は器台1/4片で、復元脚径15.8cmを測る。外面はハケ、内面はナデ。胎土はいずれも砂粒を多く含む。

SE74（Fig. 18,PL.3－③）

SE72の北側で検出した円形の素掘りの井戸。規模は112×121cm、深さ295cmを測り、八女粘土層まで掘り込んでいる。上面から140～150cmから下方は壁面が奥深く抉れる。上面の南東側には40×25cm、深さ36cmの半円形にピットが付く。埋土は黒褐色の粘土で下の方ほど灰味を帯び、地山ブロックを含み柔らかく粘性が強くなる。底から40cm程浮いた状態で完形の土器が4点出土した。

出土遺物（Fig. 20・26・28,PL.5）　井戸底出土のものを中心に述べる。140は「く」字状の口縁を持つ完形の鉢か甕。口径15cm、底径7.4cm、器高13.8cmを測る。外面ヨコハケ後ナナメハケ、内面はナデ。141～144は壺。141・142は完形で長胴気味の胴部から外反して開く口縁が付く。141は口径11.8cm、底径7cm、器高22cmを測る。外面はタテまたはナナメハケ、内面はナデで口縁部はヨコハケ。器壁は厚く、重々しい。外面黒斑があり、部分的に器壁が剥落している。142・143は完形で、複合または袋状の口縁部を持つ。142は口径14.2cm、底径6.9cm、器高26cmを測る。外面ナナメのハケ、内面はナデで頸部と底部近くはハケ。143は口径11cm、底径8.5cm、器高27.3cmを測る。口縁部は一部欠ける。調整は外面タテ・ナナメハケ、内面はヨコ・ナナメハケ。器壁は厚く、重くどっしりしている。外面上半8cm径で剥落する。140・141・142・143の胎土は精良。194は平面が不整円形を呈す木製の容器、直径9.5×8.8cm、高さ3.3cmを測る。カシの板目材をくり抜いた容器で、全面ケズリ痕が残り、内底は上げ底である。下層出土。215は砂岩の砥石。全長11.5cm、幅5cm、厚さ2cmを測り、上面を砥面として使用する。216は玄武岩の敲石。全長16.2cm、幅9.0cm、厚さ4.8cmを測り、上下両端に使用痕が残る。いずれも中層出土。

SE76（Fig. 18,PL.3－④）　北境界地で検出した円形の素掘りの井戸。規模は82×85cm、深さ285cmを測り、淡青灰白色の八女粘土まで掘り込む。上面から165～180cmのところから下が奥深く抉れる。上面南側が一部抉れる。埋土は黒褐色粘土で底程粘質が強く、ロームブロックを含む。軟質で、湧水もある。底から40cmほど浮いて横位の完形の上器と胴部の破片が出土している。

出土遺物（Fig. 20・21・26・28,PL.6）　144～149は壺。144は1/5欠で。口径12.2cm、底径7cm、器高24.4cmを測る。口端部には浅い凹線が巡り、外面タテまたはナナメハケ、内面はナデで工具痕が残る。145は扁球状の胴部2/3片。最大胴径18.5cmを測る。外面ヘラケンマ、内面はヨコハケ。146はほぼ完形だが、口縁部2/3を欠失する。復元口径14cm、胴部最大径30cm、器高31.5cmを測る。内外面、底部はハケ。大きく膨らむ胴部に頸部が締まる、小さい口縁部が付く。底部はやや凸レンズ状を呈す。2カ所黒斑がある。147は複合口縁の5/6片。口径23cmを測る。内傾する口縁部の端部の外縁は屈折して上方につまみあげられる。頸部には突帯が巡

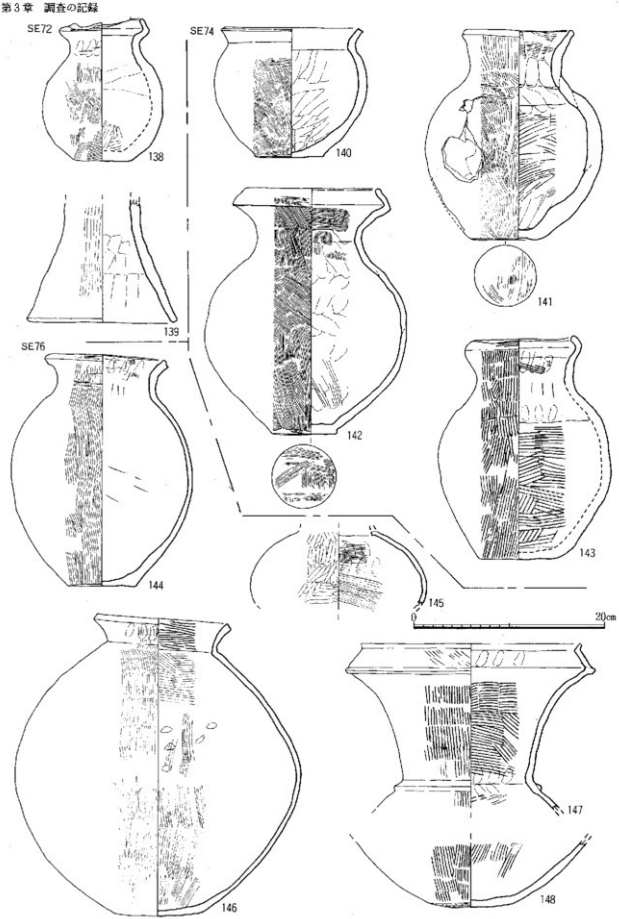


Fig. 20　SE72・74・76出土遺物（1/4）

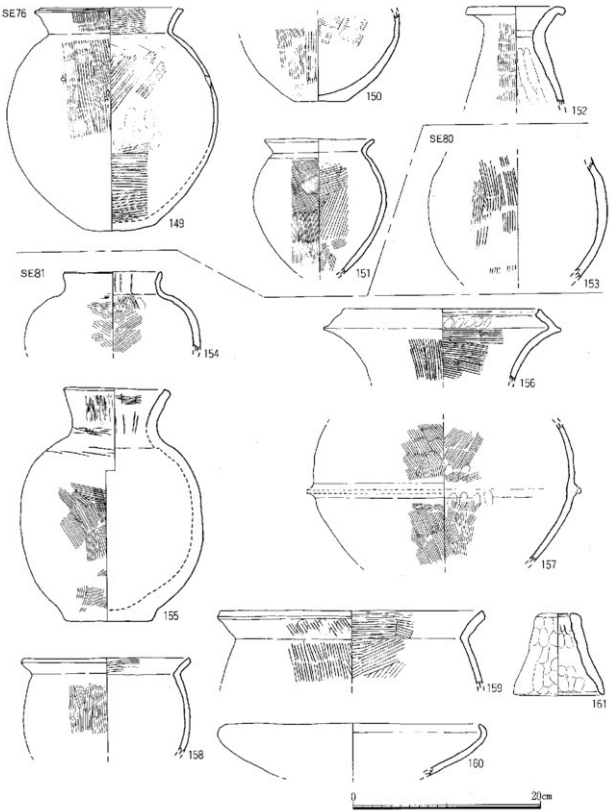


Fig. 21　SE76・80・81出土遺物（1/4）

る。頸部内外面ハケ、148は凸レンズ状の底部を持つ1/4片。内外面、底部までハケ。149はほぼ完形で、丸い胴部、「く」字状に開く口縁部を持つ。口端部はやや凹む。凸レンズ状の底部を持つ。口径1

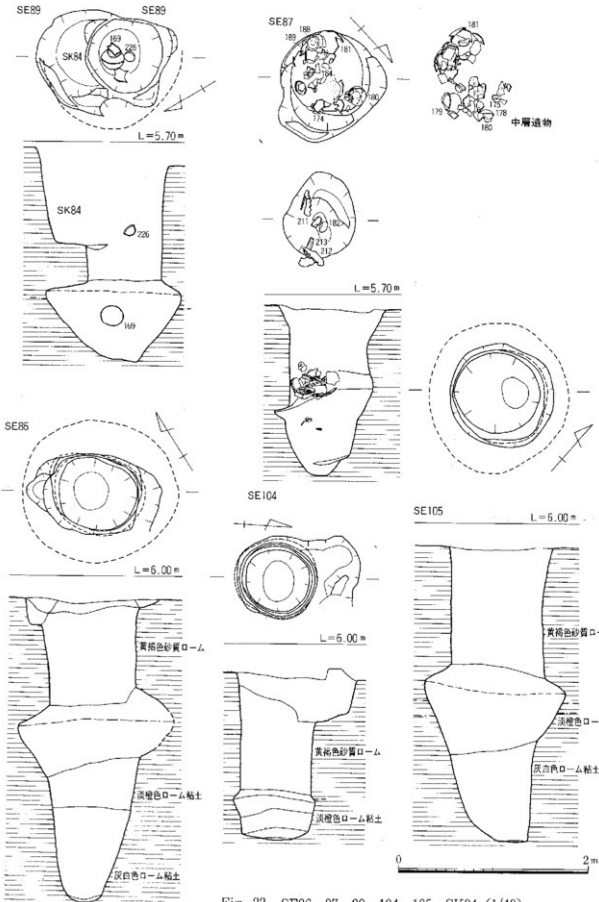


Fig. 22　SE86・87・89・104・105・SK84 (1/40)

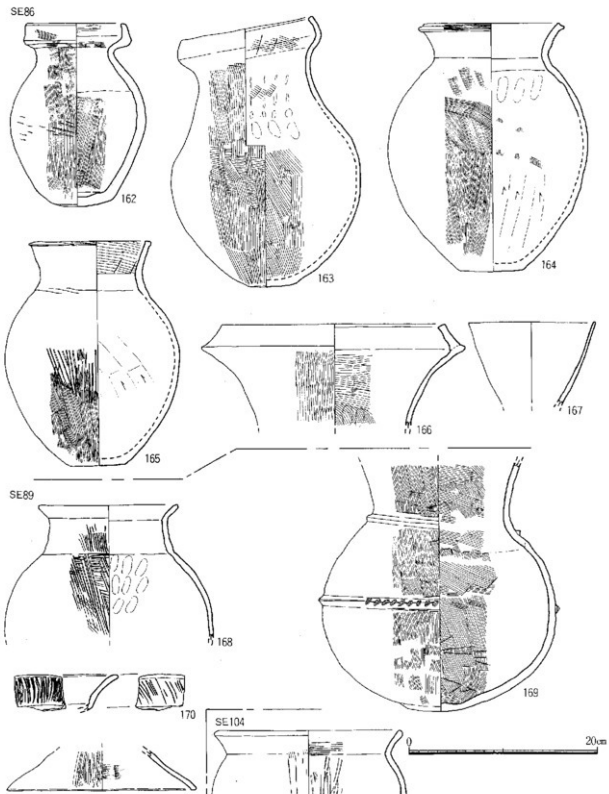


Fig. 23　SE86・89・104出土遺物（1/4）

5cm、底径7.6cm、器高23.6cmを測る。外面上半は丁寧なハケ、内面もハケ。150は底部片で、底径5.5cmを測る。内外面ハケだが、内面工具痕が残る。151は甕。口縁から胴部片。復元口径11.6cmを測る。

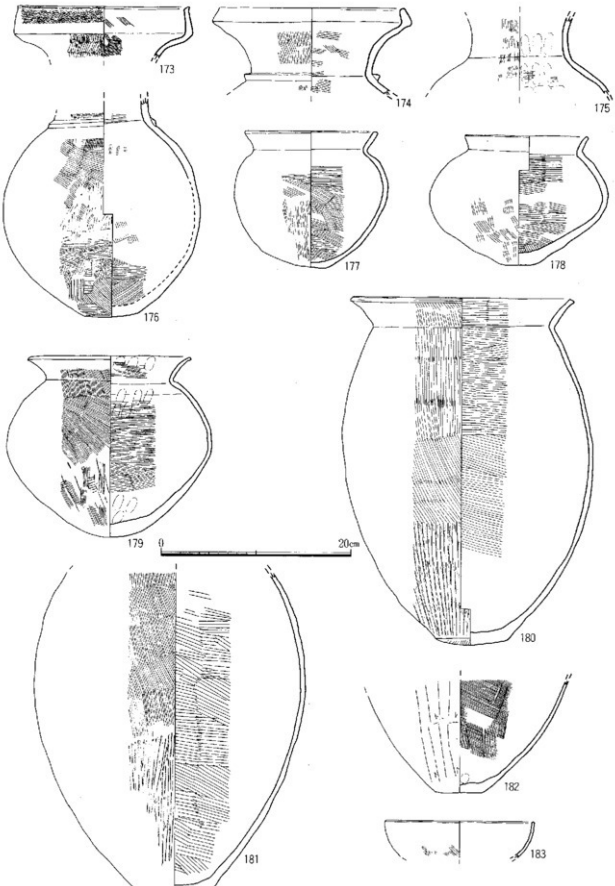


Fig. 24　SE87出土遺物 I （1/4）

内外面細かいハケ。外面黒斑あり。152は器台受部片。復元口径10.2cmを測る。外面ハケ、内面は指ナデ。胎土は145・151は精良、147～149・152や砂粒を多く混入する。148・152が下層、その他は底からの出土。195は板材で乾燥したのかやや反る。現存長25.2cm、幅4.2cm、厚み1.1cmを測る。明瞭な加工痕は見られない。スギの柾目材か。217は長方形の板状の石製品。全長10.4cm、幅6.8cm、重さ148.2ｇを測る。粗い敲打調整で、両側面が一部抉れる。石材は砂岩で、沈子などの漁具か。中層出土。

SE80（Fig. 18,PL.3－⑤）

円形の素掘りの井戸で、底はすぼまる。規模は直径89×83cm、深さは224cmを測る。壁面は上面から下105～125cmのところから奥深く抉れる。埋土は黒褐色粘質土を主体とし、下方ほど暗く軟質で粘性が強い。上面東側に直径20cm、幅10cm、深さ７cmの半円形のピットが付く。

出土遺物（Fig. 21,PL.6）　153は壺の胴部1/4片か。復元最大胴径19cmを測る。器表はやや磨滅するが、外面はハケ、内面はナデ。器壁は比較的厚手である。下層出上。

SE81（Fig. 18,PL.3－⑥・⑦）

SC85の東側で検出した円形の素掘りの井戸で、井戸底は先すぼりである。規模は直径102×97cm、深さは354cmを測り、灰白色の粘土層まで掘り込んでいる。壁面は上面から下115～130cmのところから奥深く抉れる。その抉れ部に長さ140.7cmの建築材がはまりこんでいた。埋土は黒灰褐色粘土で下

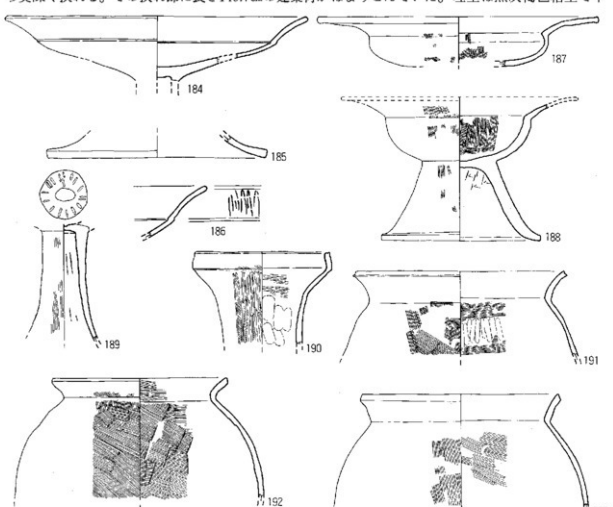


Fig. 25　SE87出土遺物Ⅱ（1/4）　0　20cm

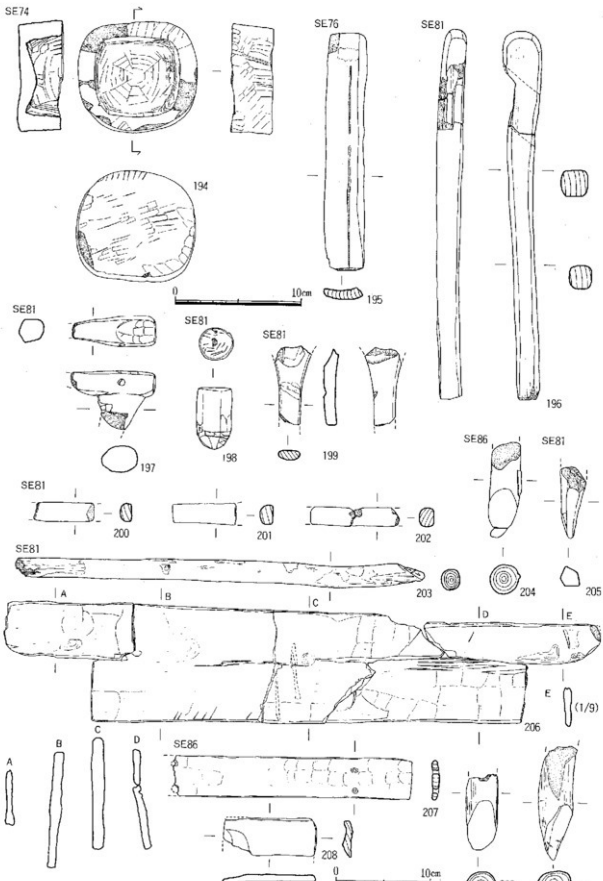


Fig. 26　各井戸出土木器 I（1/3、1/4、1/9）

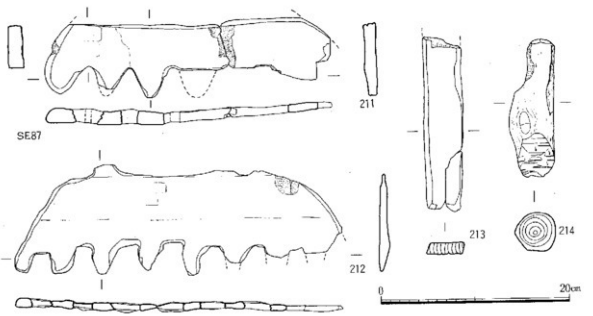


Fig. 27　各井戸出土木器Ⅱ（1/4）

程粘性が強く、また地山ロームブロックを多く含み、軟質である。底から約50cm上で完形の壺が1点出土した。

出土遺物（Fig. 21・26,PL.6）　154～157は壺。154は直口の口縁1/3片。復元口径10.4cmを測る。胴内外面ハケで、黒斑がある。155は完形。口径10.2cm、底径9.2cm、器高24.8cmを測る。器壁は厚手で、重くどっしりしている。外面ハケ、内面はナデ。156は複合口縁の1/4片。復元口径10.8cmを測る。口端部は凹む。内外面ハケ。157は胴部1/3片。胴部下半にコ字状の突帯が1条巡る。内外面ハケ。内面は黒く、黒色顔料が塗られているのか。156と同一個体か。158・159は甕で「く」字状を呈す口縁部片。1/6片、1/3片で、復元口径17.5cm、28cmを測る。158の外面はハケ、159は内外面ハケで、外面

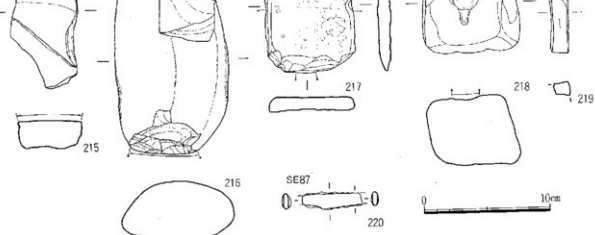


Fig. 28　各井戸出土石器・鉄器（1/3）

煤が付着する。160は高坏坏部1/4片。復元口径27cmを測る。器表は磨滅がひどいが、ナデかケンマ。161は支脚1/4片。口径4.6cm、脚径9.6cm，器高9.6cmを測る。内外面指押さえ仕上げ。頂部中央に復元2.5cmの円孔がある。胎土は156・157は精良、その他は砂粒を多く含む。196は鉄鎌を装着する柄で、全長39cm、柄の断面は隅丸方形を呈す。125°の角度で装着孔が開いている。197は鉄斧を装着するための柄台部。台部全長6.7cm、幅2.4cmを測る。台部には削り痕が残る。柄と台部の角度は60°を測る。198は独楽状を呈す浮子状の製品。全長4.9cm、直径2.5×2.7cmを測る。細かい削り痕が残る。栓の可能性もある。199は杓子状の製品。残存長6.2cmを測る。杓子の部分はくっている。表面は丁寧な磨き。200～202は同一個体と思われる柄の一部か。断面蒲鉾形を呈し、表面は丁寧に磨かれる。203・205は杭で、205は削った先端。203は樹皮が残る。206は建築材の横架材か。全長140.7cm、最大幅28cm、厚さ3cm前後を測る。槌かに削り痕が残る。

SE86（Fig. 22,PL.3－⑧）

SE80の南側で検出した楕円形の素掘りの井戸で、底は先すぼりである。規模は直径85×95cm、深さは322cmを測り、灰白色の粘土層まで掘り込んでいる。壁面は上面から95～115cmのところから奥深く抉れる。埋土は黒褐色粘質土で下層程粘性が強く、軟質である。上面西側一部に直径40cm、幅17cm、深さ15cmの半円のピット状の落ち込みが付く。底から4点の完形品が出土した。

出土遺物（Fig. 23・26・28，PL.6）　いずれも壺。162・163は完形の袋状口縁部壺で、凸レンズ状の底部をもつ。それぞれ口径は10.4cm、14cm、底径は6.4cm、4.8cm、器高は19.5cm、28.6cmを測る。胴部内外面はハケ。162の胴外面に叩き痕跡が残る。164・165も完形で、口径は14.2cm、13cm、底径26.4cm、5.8cm、器高21.2cm、18.4cmを測る。いずれも口端部が外傾し、端を外につまみ出す。164の胴部外面は細かいハケ、内面下半は板ナデか。165は胴外面下半はハケ、上半は丁寧なナデ、内面は板ナデ。166は複合口縁の口縁部1/3片。復元口径23.5cmを測る。内外面ハケ。167は外に開く長頸壺の口縁部1/3片か。復元口径13.4cmを測る。磨滅がひどく、調整は不明。土師器に近い胎土で精良。204・209・210は断面円形の芯持ちの杭で、樹皮が残る。207・208は長方形の板材。207は有孔板材で、残存長25cm、幅4.2cm、厚さ0.8cmを測る。削り痕が明瞭に残り、両端に2個ずつ穿孔がある。また図示していないが桜皮が出土している。218は方形の凹石で、全長9.9cm、最大幅7.6cm、最大厚5.5cmを測る。上面に使用痕が残る。石材は花崗岩。木器は底層、166・167。石器は下層出土。

SE87（Fig. 22,PL.4－①）

SC114を切る不整楕円形状の素掘りの井戸。規模は119×107cm、深さ180cmを測る。底は小さく窄まる。壁面は上面から下75～110cmのところからやや抉れる。埋土は黒色粘土を主体とし、下層は黒灰色泥土で軟質となり、湧水もある。土層断面で上面から切り込むピットらしき遺構が確認出来た。底から55cmほど浮いたところで農耕具などの木器や、種子などが出土している。

出土遺物（Fig. 24・25・27・28,PL.6）　井戸埋土中層から土器が東壁寄りに沿って大量に廃棄されていたが、なかには完形品も含まれる。

173～189は中層土器群から出土。173～179は壺。173・174は長頸の複合または袋状口縁片。3/4片、1/2片で、復元口径18cm、19.5cmを測る。173の口縁外面に櫛描波状文を加え、頸部外面はハケのちヘラケンマ。内面ハケ。175は長頸の頸部片。磨滅がひどいが内外面ハケ。176は頸胴部片で、胴部最大径20.6cmを測る。頸部に1条の二角突帯が巡り、底部はやや凸レンズ状を呈す。外面はナナメのハケ、内面はナナメのハケとナデ。177～179は外に開く広口の胴部が大きく張る、底部がわずかに平底の名残を残す器形。鉢の可能性もある。177は復元完形で、口径14cm、器高14.5cm、178は口縁部1/2を欠するがほぼ完形で、口径13cm、器高13.6cm、179はほぼ完形で、口径17.2cm、器高19.2cmを測る。器表

はいずれもやや磨滅するが、177は外面はハケのちナデ、内面はハケで口縁はヘラケンマ。178は外面ハケのちナデ、内面はハケ。179は内外面細かいハケ、外面下半はハケのちタタキのちヘラナデ。178・179には黒斑がある。178の胎土は精良。178は焼成は良好。180～182は甕。180・181は長胴の甕で底部は凸レンズ状を呈す。180は復元完形。口径23.5cm、底径7.8cm、器高36.7cmを測る。181は口縁部欠失するが、最大胴径28.5cmを測る。181は底部片で底径5cmを測る。179の内外面上半はハケ、外面下半は板ナデ。外底部もハケ。180は外面上半は細かいハケ、下半は板ナデ、内面は右回転のハケ。182は外面のヘラナデ、内面は細かいハケで工具痕が残る。外底部はヘラナデ。180は外面2カ所、181は1カ所黒斑がある。180の口縁部外面には煤が付着し、182は煮炊きに使われたのか内外面煤が厚く付着する。180・182の焼成は良い。183は椀形の鉢の1/4片。復元口径15.8cmを測る。ナデで外面下半にハケが残る。胎土に粗砂を多く含む。184～186・189は高坏。184は大きく開く皿状の坏部の小片。復元口径32.1cmを測る。坏底部の破片とで復元した。器表は磨滅がひどく調整は不明。185は大きくラッパ状に開く脚部1/6片。復元脚径23.4cmを測る。磨滅がひどい。186は坏部口縁部細片。外面には黒塗りのヘラの暗文が施されている。189は高坏脚筒部。磨滅がひどいが、ハケが残る。187・188は脚台付の鉢か、いずれも口縁が鍔状に長く、底部が丸底を呈し、浅い。187は1/6片で、復元口径29.7cmを測る。口端部は下方にわずかにつまみだす。外面はハケのちヘラナデか。内面は細かいハケ、口縁内外はナデ。188は口縁部を欠失する。脚径16.8cmを測る。外面はハケのちナデ、坏部内面は細かいハケ。脚内面はナデとヘラ仕上げ。188の胎土は精良。190は長頸の袋状口縁部3/4片。口径14.1cmを測る。頸部外面はハケのちヘラケンマ、内面はナデ。胎土は精良。191～193は口縁から胴部片。1/3片、口縁部一部欠、1/2片。復元口径22cm、18.2cm、20.7cmを測る。いずれも胴部内外面はハケ。口縁部はヨコナデ。191・193の口端部は浅い凹線が巡る。191の外面は煤がびっしり付着する。192は器壁の剥落がひどい。192・193は胎土に砂粒を多く含む。211～214は木製品。211・212は整地具の杷（さらえ）の刃部片で、欠損がひどい。調整は不明。残存長7.7cm、11.5cm、残存刃幅は30cm、34.4cmを測る。カシの柾目取りの材である。213は板材。残存長18.2cm、幅4cm、厚さ1.3cmを測る。明瞭な加工痕は見られない。スギの柾目か。214は芯持ちの杭材か。上端は削られ、先端は斜めに切られる。全長14.8cm、径4.3～4.5cmを測る。220は鉄製の刀子と思われる茎から刃部片。残存長4.6cmを測る。

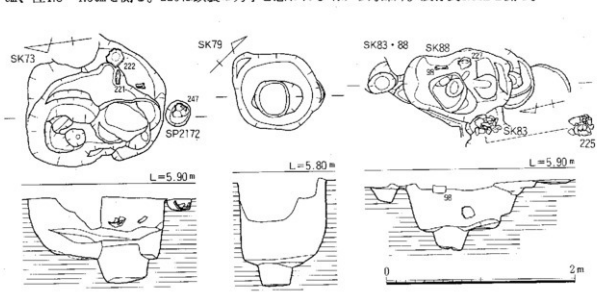


Fig. 29　SK73・79・83・88 (1/40)

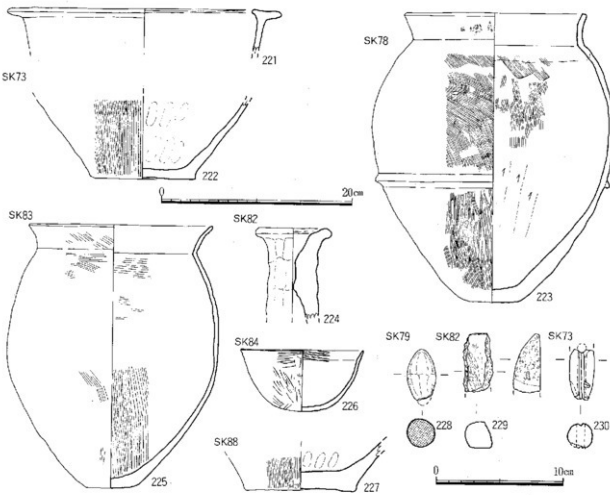


Fig. 30　各土坑出土遺物（1/4、1/3）

SE89（Fig. 22,PL.4－②）

SC77を切り、SK84に切られる円形の素掘りの井戸。規模は90×85cm、深さ226cmを測り、八女粘土層まで掘り込んでいる。上面下145cm位のところから、壁面は奥深く抉り込む。埋土は下層が黒色粘土で地山ロームブロックを含み、粘性が強く軟質になる。湧水もある。底から40cm程浮いたところで壺が1点出土した。

出土遺物（Fig. 23,PL.6）　168・169は壺。168は口縁部1/4片。復元口径14.8cmを測る。内傾気味の頸部から外に開く口縁で、頸・胴部外面は太めのハケ、内面はナデ。169は口縁部欠失する。頸部と胴部中央に三角の突帯が巡る。胴部の突帯には櫛状の刻みが付く。底部は丸みを持って突出する。外面はタテハケ、内面はナナメハケ。内面のハケは単位が明瞭に残る。170・171は高坏。170は坏部口縁細片で、内外面黒色顔料による暗文を加える。171は脚部1/2片で、復元脚径20cmを測る。脚外面はハケのちヘラケンマ、内面細かいハケ。168・171は胎土が精良、169は砂粒多量混入。169の外面には黒斑が2か所ある。

SE104（Fig. 22,PL.4－③）

SC114の東側で検出した円形の素掘り井戸。規模は103×110cm、深さ312cmを測り、灰白色の八女粘土層まで掘り込んでいる。上面下130～140cmのところから壁面は奥深く抉り込まれている。井戸底

はやや北にかたよる。埋土は暗褐色粘土で地山ロームブロックを多く含み、下層程黒く粘性が強く、湧水がひどく、泥土に近くなる。人為的に埋められた状況を示す。

出土遺物（Fig. 23）　172は「く」字状の甕の口縁部1/4片。復元口径20cmを測る。器表は磨滅がひどいが、胴部外面はナデ、内面は板ナデか。口縁内外面はハケのちナデ。

SE105（Fig. 22,PL.4－④）

SE74、SK75・79に上面が切られる円形の素掘りの井戸。規模は直径80×86cm、深さは182cmを測り、桃色の八女粘土まで掘り込むが浅い。壁面は上面から下130cm前後でわずかに抉れる。埋土は黒褐色粘質土で下層程粘性が強く、湧水により泥土に近くなる。底から完形の土器はない。

出土遺物　中・下層から中ビニール袋2袋分の遺物が出土している。中期中・後半の甕口縁部片の細片が大半で、図化出来るものはなかった。

土坑

土坑としたものは12基である。他遺構に伴うものを除いて、主なものについて説明を加える。

SK70　北西隅基礎攪乱にかかるやや弧状を描く土坑。長さ1.9m、幅1m、深さ6～20cmを測る。住居址の一部か。埋土は暗褐色粘質土で地山ローム土を混入する。**出土遺物**は弥生中期の土器片が少量出土している。

SK71　北西隅基礎攪乱に切られるもので、長方形の土坑状を呈すが全容は不明。規模は95×65cm、深さ15～23cmを測る。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。**出土遺物**は弥生土器片が少量出土している。

SK73（Fig. 29,PL.4－⑤）

北側境界地で検出した隅丸長方形状の土坑。規模は146×120cm、最大深さ90cmを測る。底面の東側にはテラス状の高まりがあり、西側の南側はピット状に落ち込む。表面観察では確認出来なかったが、北側東西方向の土層観察によると、西側を中心に遺構の重複している様子があるので、西側の底面の状況はそれを示すものであろう。埋土は黒褐色粘質土を主体とし、地山ローム土を含む。

出土遺物（Fig. 30）　遺物はかなりの量が出土している。大半が弥生土器であるが、図示できるものは少ない。221・222は弥生土器の甕で、221はやや外傾する逆「L」字形を呈す口縁部1/4片で、復元口径29cmを測る。器表の磨滅がひどく調整不明。222は底部片で、底径11cmを測る。外面は丁寧なタテハケ、内面はナデ。230は滑石製の有溝石錘1/2片。残存長4cm、幅2.4cmを測る。

SK78　北東側SE74などに切られる土坑で、全容は不明。断面観察では直径106cm前後、最大深さ35cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で地山ローム土を含む。

出土遺物（Fig. 30,PL.6）　弥生土器片を中心にかなり量が出土している。223は甕で胴部を一部欠。口径19.2cm、底径6.3cm、器高30.5cmを測る。口縁部は直立気味に開き、胴部下半に二角の突帯が付く。底部はやや丸みを持った平底。器表は磨滅がひどいが、胴部外面は細かいナナメハケ、内面上半はハケ、下半はナデ。口縁部はハケのちナデ。焼成は良い。

SK79（Fig. 29）

SK78の下で検出した不整円形を呈する土坑。規模は93×82cm、最大深120cmを測る。底面はやや擂鉢状を呈し、底面には直径40cm、深さ24cmのピットがある。円形竪穴住居址の柱穴の可能性があるが、柱穴にしては大きく深すぎる。埋土は黄橙色の地山ロームブロックで人為的に埋めた状況を示す。

出土遺物（Fig. 30）弥生土器片が出土している。228は土製の投弾。残存長4.1cm、直径2.2cmを測る。丁寧なナデ仕上げである。

SK82　SK83西側のピット状の土坑。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物（Fig. 30）　土器片のほかに柱状片刃石斧の刃部片229がある。224は器台1/2片で、復元

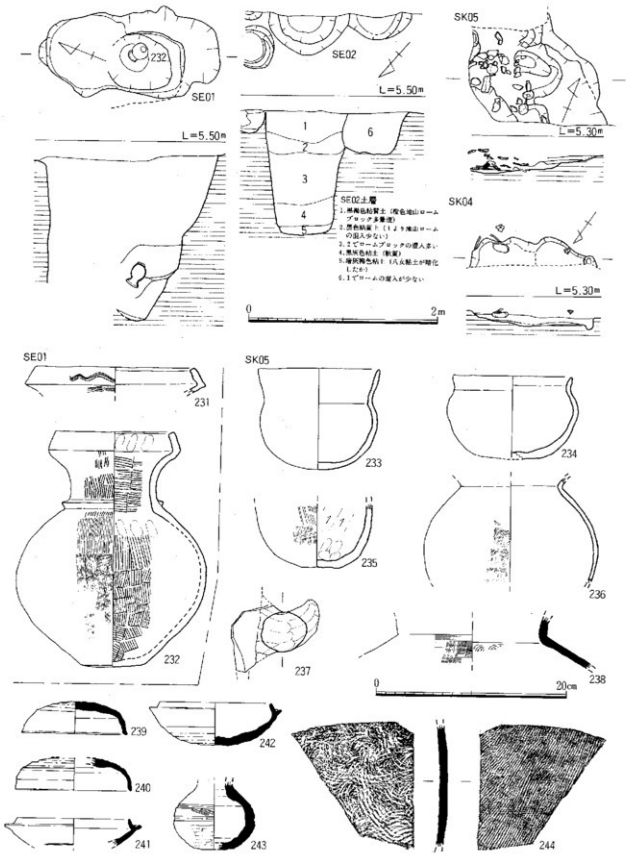


Fig. 31　Ⅱ区検出遺構と出土遺物（1/40、1/4）

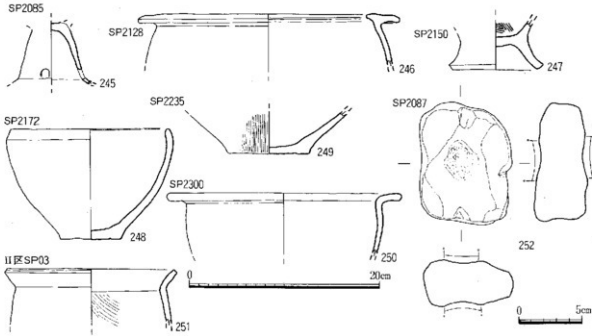


Fig. 32　Ⅰ・Ⅱ区ピット出土遺物（1/3、1/4）

口径8.0cmを測る。指押さえ仕上げである。229は残存長4.6cmを測る。側面にはまだ敲打調整痕が残り、未製品であろうか。石材は火成岩か。

SK83（Fig. 29,PL.4－⑥）

SK88とSK82に切られる小土坑。残存規模は45×20cm、深さ10cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で、地山ローム土を含む。

出土遺物（Fig. 30,PL.6）　弥生後期の甕が1個体分の破片が出土した。225は復元完形で、LI縁部1/3片が残り、復元口径19.3cmを測る。「く」字状を呈すLI縁で、底部は丸みをもった平底。器表は磨滅がひどく調整は不明瞭だが、内外面にハケメが残る。外面に2カ所黒斑が残る。

SK84（Fig. 22,PL.4－②）

SE89を切る円筒形の土坑。規模は直径110cm、深さ140cmを測る。埋土は黒褐色粘質土を主体とし、下層ほど粘性が強く、地山ロームブロックを多く含む。

出土遺物（Fig. 30,PL.6）　遺物は出土量は余り多くないが、底からわずかに浮いた所で完形の鉢が1点出土した。226は土師器の完形の鉢。口径13cm、器高6.5cmを測る。底の深い椀形の鉢で、口縁の内面にはわずかに稜を持つ。内外面ハケ状工具による雑な調整で焼成は良い。

SK88（Fig. 29,PL.4－⑥）

隅丸長方形状の土坑で、規模は117×80cm、最大深さは70cmを測る。壁はかなりの傾斜をもつ。底面はやや凹凸があり、中央に42×41cm、深さ26cmの台形状のプランを持つピットがある。埋土は黒褐色粘質土を主体とし、地山ロームブロックを含む。長軸線上の両側にピットがあり、いわゆる松菊里型の住居の中央土坑の可能性がある。

出土遺物（Fig. 4・30,PL.6）　遺物の出土量が少ないが、弥生中期の土器片が出土している。227は弥生土器の甕か壺の底部片。底径10.8cmを測る。胴外面はハケ、内面はナデで、底部は雑なナデで、わずかに上げ底である。98は鉄製の鋤先で、両端を折り返す。全長9cm、最大幅12.5cm、厚さは最大で5mmを測る。腐食がひどく、刃先も欠けている。227は下層、98は上層から出土した。

Ⅱ区の調査

井戸

SE01（Fig. 31,PL.4－⑦）

基礎攪乱の下で確認した素掘りの楕円形状の井戸。第33次調査の井戸と切り合う。規模は100×120㎝以上、深さは175㎝を測る。井戸は段を持って深くなり、壁面の西側が抉れる。埋土は黒色の粘質土で下層は粘性が強く、泥土に近くなる。底から35㎝浮いたところで礫が1点出土した。

出土遺物（Fig. 31,PL.6）　231・232は複合口縁の弥生土器の壺。231は複合口縁部1/8片。復元口径16.5㎝を測る。口縁外面には3条単位の櫛描きの波状文を加える。232は完形で口縁が一部欠ける。口径12.5㎝、底径6.6㎝、器高24.9㎝を測る。頸部に三角の突帯が巡り、底部は丸みを持った平底である。胴部外面は細かいハケ、内面が粗いハケ、頸部外面は太めのハケ、口縁部はナデ。231は胎土が精良。遺物の保存は井戸のため良い。

SE02（Fig. 31）

東壁にかかる円筒形の素掘りの井戸。半掘で全容は不明だが、直径84㎝、深さ132㎝を測る。八女粘土まで掘り込んでいるが、他の井戸に比べて浅い。埋土は黒褐色粘質土から黒灰色粘土に変わり、地山ロームブロックを含む。

出土遺物　量的に少ない。図示していないが、弥生後期中頃の複合口縁の破片が出土している。

土坑

SK04（Fig. 31）

SK05の北側で検出した不定型の浅い土坑。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物　土師器の細片などが少量出土している。

SK05（Fig. 31,PL.4－⑧）

調査区南端で検出した不定型の浅い土坑。規模は1.3m以上、長さ1.5m以上、最大深さ20㎝を測り、南側に向かってだらだらと深くなる。埋土は黒褐色粘質土で地山ロームブロックを含む。

出土遺物（Fig. 31,PL.6）　南側を中心に出土。古墳時代の土師器、須恵器などを含む。須恵器は九州編年のⅢB期に相当する。233～237は土師器。233は坩1/4片。口縁が胴部より開く器形。複合口径12.6㎝、器高10.7㎝を測る。器表は磨滅がひどく調整不明。234・235は鉢か。234はわずかに屈折して外に開く口縁を持つ。1/3片で、復元口径12.4㎝、器高8.8㎝を測る。器表は二次的加熱をうけたのか、剥落がひどくボロボロである。235は底部1/2片で、やや雑な造り。器表は磨滅がひどいが、外面はハケ、内面はヘラケズり。234の色調はにぶい赤褐色で、胎土はいずれも粗砂を多く含む。236は布留式甕の胴部1/3片で、胴部最大径は18.5㎝を測る。器表の磨滅がひどいが、外面はハケが残り、煤が一部付着する。胎土は精良。237は把手。把手部を貼り付けている。磨滅がひどいが、指押さえ仕上げ。長さ6.8㎝、直径4.2×4.8㎝を測る。238～244は須恵器。238は甕の頸部1/8片。外面は平行タタキのちカキメ、内面は同心円状の当て具痕が残る。239・240は坏蓋。239は2/3片で、器形は歪むが口径は約11㎝、器高は3.4㎝を測る。口端部は内面に稜が付く。ヘラ削り方向は逆時計回り。240は1/4片で、復元口径12.2㎝、器高3.4㎝を測る。238・239は坏身。それぞれ1/3片で、復元口径は10.8㎝、受部径は14.4㎝、14㎝、器高は239が4.5㎝を測る。口縁部は受部から内傾して立ち上がる。241の外底にはヘラ記号がある。243は瓶の胴部1/2片。胴部上半に2条の沈線が巡り、その間に櫛歯による刻み目を加える。外底は手持ち削り。244は甕の胴部片。外面平行タタキで4条の沈線が巡り、内面には同心円状の当具痕が明瞭に残る。238は焼成がやや甘い。

SK06　東壁にかかる不定型の浅い土坑。埋土は暗灰褐色粘質土で、深さ13㎝を測る。

出土遺物　須恵器を含む土器片が少量出土している。

ピット出土遺物（Fig. 32,PL.6）　245はSP2085出土の古墳時代の土師器の高坏脚部1/2片。直径9㎜の透かし孔がある。器表の磨滅はひどい。246はSP2128出土の弥生時代中期後半の甕口縁部1/8片。器表の磨滅はひどい。247はSP2150出土の脚台付きの鉢1/6片。外面磨滅がひどいが、内面は粗いハケ。248はSP2172出土の弥生中期後半の鉢3/4片。口径16.8㎝、器高11.7㎝をはかる。器表は磨滅がひどく、調整は不明。249はSP2235出土の壺の底部片。外面ハケ、内面はナデ。250はSP2300出土。甕か鉢の口縁部1/8片。器表は磨滅がひどく、調整は不明。251はⅡ区のSP03出土の弥生土器の甕口縁部片。内面はハケ。252はSP2087出土の凹石。全長9.7㎝、幅7.2㎝を測る。上下面に使用痕が残る。石材は花崗岩。

3．小結

以上調査の概要について述べたが、ここでは主な遺構について若干の整理を行い、まとめとしたい。

竪穴住居址　建て替えも含め検出した住居は約12軒＋α、時期的には弥生中期のもの8軒、後期終末頃のもの3軒、不明1軒となる。中期の住居は円形住居址で、SC・65・66・85・114～117・118などである。特にSC66・85・114～117は重複しあい、また遺物も多量に出土している。切り合い関係からSC117→116・114→115→66→85となる。住居は平面プランの確認で、SC114・66・85の3形態が確認されたが、出土遺物から見て、中期後半から末頃・後期初頭の時期の内におさまるであろう。SC114は径9.2m～9.6m近くの大型住居で、この時期の平均的住居の規模よりは大きい。同規模の住居は第50次地点でも1軒確認されている。第50次地点周辺と当地点の周辺の間には細形銅剣が出土した甕棺墓群があり、それを挟んで別の集落があるのであろう。後期終末の住居は長方形プランのSC02・77などである。

掘立柱建物　3棟検出したが、2棟の総柱建物は柱穴からわずかに出土した須恵器から古墳時代後期以降が考えられる。Ⅱ区の土坑と古くても同時代であろうか。

井戸　検出した井戸は13基。時期的には弥生後期前半から後期終末ごろの時期である。出土遺物から時期を見ると、時期的に古い後期前半のものはSE72・86、後期中頃のものはSE74・ⅡSE01、後期後半のものはSE76・81、後半から終末頃のものは68・87・89などである。第33次地点では弥生中期の井戸が検出されているが、当調査区では確認されていない。また後期でも終わり頃の井戸は底の掘り込みが浅く、それ以前のものは深い、これはその当時の水位の変化、しいては環境の変化を示すものかも知れない。

土坑　土坑はⅠ区のSK73が弥生中期、SK78・83が後期後半代、SK84が古墳時代前期であろうか。Ⅱ区の土坑はSK05が出土須恵器から古式土師器を含むものの古墳時代後期の6世紀後半代に位置づけられる。

4．井戸出土の種実の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

本調査区は、比恵遺跡の北側東斜面上にあたり、発掘調査の結果、竪穴式住居や井戸を中心に、弥生時代から古墳時代の遺物が出土した。今回は、弥生時代中期～後期の植物質食料に関して情報を得る目的で、井戸から出土した種実について同定を行った。その結果、8種類の種実遺体が同定された（表1）。

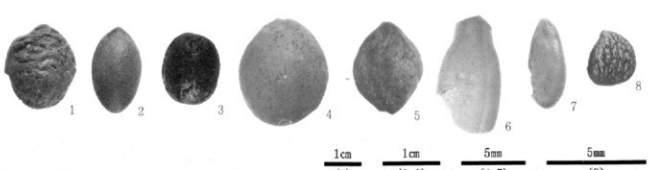
表1　種実同定結果

遺構名	遺構性格	時期	種類・個数
SE74　R1	井戸	弥生時代後期中頃	ムクノキ（4）
SE74　下層	井戸	弥生時代後期中頃	ムクノキ（4）、モモ（1）
SE74　R4	井戸	弥生時代後期中頃	ムクノキ（1）
SE76　下層	井戸	弥生時代後期後半	イヌガヤ（3）、ムクノキ（79）、モモ（1） ヒョウタン類（1）、コナラ属（2）
SE81　下層	井戸	弥生時代後期後半	イヌガヤ（1）、ムクノキ（7）
SE81　R1	井戸	弥生時代後期後半	ムクノキ（3）、メロン類（11）
SE86　R2	井戸	弥生時代後期前半	ムクノキ（1）
SE86　R3	井戸	弥生時代後期前半	ムクノキ（9）、サクラ属（1）
SE86　R4	井戸	弥生時代後期前半	ムクノキ（8）
SE89　R1	井戸	弥生時代後期後半	ムクノキ（1）、モモ（1）、サクラ属（1） カラスザンショウ属（1）、メロン類（2）

検出した試料のうち、モモ、ヒョウタン類、メロン類はいずれも渡来した栽培植物であり、周囲での栽培が示唆される。これらの種類はいずれも弥生時代以降検出例が急増し、北九州でも多くの検出例が知られている。

イヌガヤ、コナラ属、ムクノキ、サクラ属は周囲の山野に自生していたと考えられる。イヌガヤは搾油の原料として、他の種類は食用として古くから種実が利用されている。

写真図版



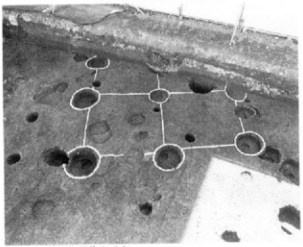
1．モモ（SE76 下層）2．イヌガヤ（SE76 下層）3．コナラ属（SE76 下層）4．ムクノキ（SE76 下層）
5．サクラ属（SE86 R3）6．ヒョウタン類（SE76 下層）7．メロン類（SE81 R1）8．カラスザンショウ属（SE89 R1）

(1). 調査区全景（南東から）

(2). Ⅰ区全景（北東から）

(3). Ⅱ区全景（北東から）

(4). SB111・SC65（東から）



(5). SB112（北から）

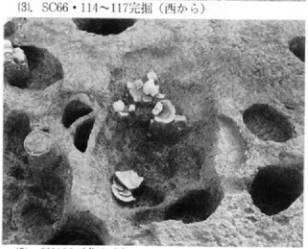
PL. 2

(1). SC66・85（西から）

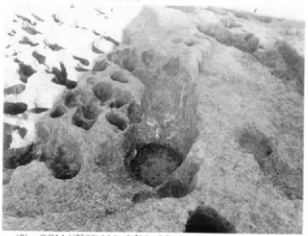
(2). SC66・114（西から）

(3). SC66・114～117完掘（西から）

(4). SC85鉄斧出土状況



(5). SK106（北から）



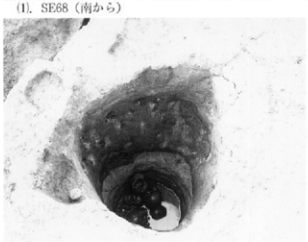
(6). SC114下SD110（南から）

(7). SC77（北から）

(8). SC77遺物出土状況

(1). SE68（南から）

(2). SE72（南から）



(3). SE74（北東から）

(4). SE76（西から）

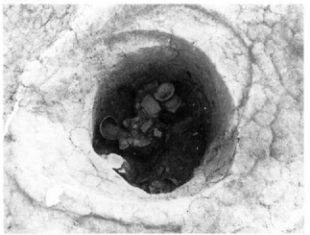
(5). SE80（南西から）

(6). SE81（東から）

(7). 同遺物出土状況

(8). SE86（北西から）

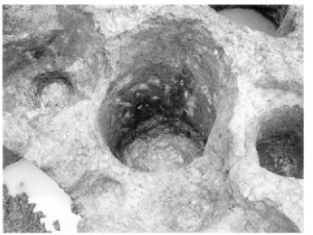
PL. 4



(1). SE87（北西から）

(2). SE89・SK84（北西から）

(3). SE104（南から）



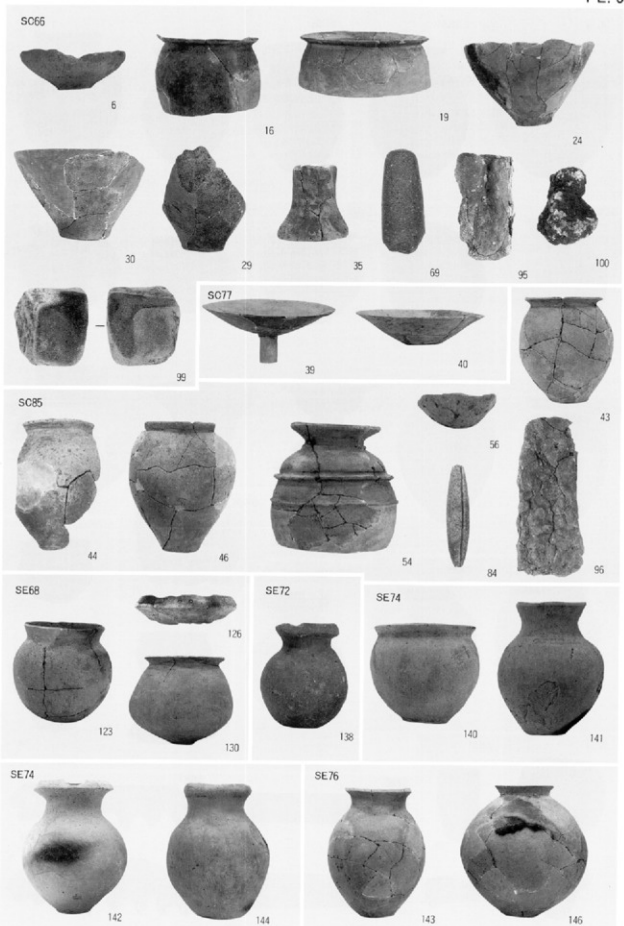
(4). SE105（北東から）

(5). SK73（西から）

(6). SK83・88（西から）

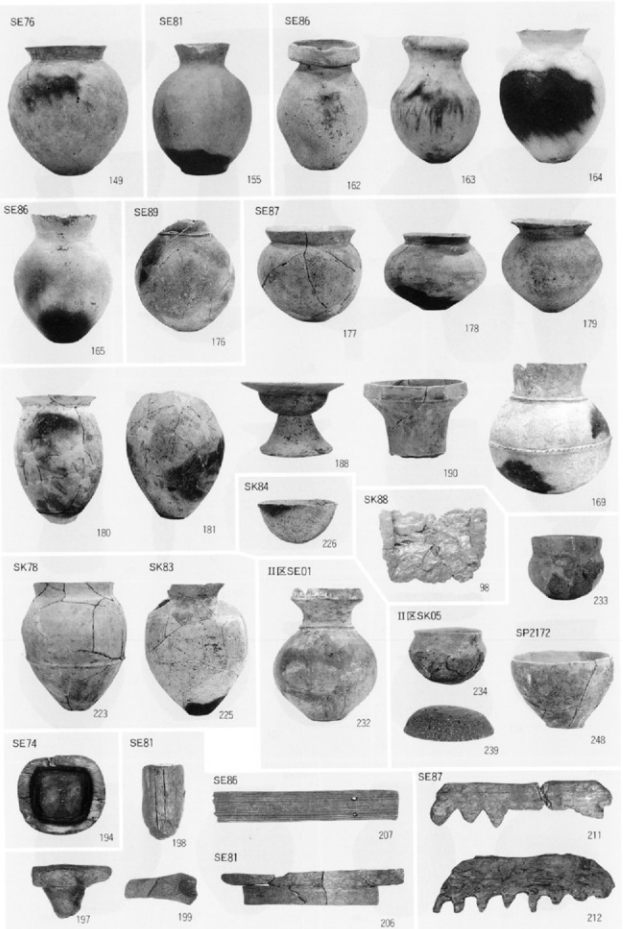
(7). Ⅱ区SE01（南から）

(8). Ⅱ区SK05（東から）



各遺構出土遺物Ⅰ（縮尺不統一）

PL. 6



各遺構出土遺物II（縮尺不統一）

福岡市埋蔵文化財調査報告書第453集
比恵遺跡群（22）
－比恵遺跡群第43次発掘調査報告書－
1996年（平成８年）３月29日
発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８－１
印　刷　セントラル印刷株式会社
福岡市中央区大宮１丁目５－13